

小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2017.3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【ニツ梨豆岡向山遺跡群】(平成 17～21 年度)

〔調査地〕	石川県小松市ニツ梨町
〔調査原因〕	個人農地
〔調査面積〕	2,267m ²
〔発掘調査〕	2005. 7.21～2005.10.17 (260m ²) 2006. 9.19～2006.12.12 (640m ²) 2007.10. 2～2007.11.30 (280m ²) 2008. 9. 1～2009. 3.18 (487m ²) 2009. 9. 1～2009.12.11 (600m ²)

〔調査担当〕 大橋由美子

発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。

4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 27・28 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第 1 章の執筆を宮田 明が担当し、第 2 章と付章 1 の執筆を望月精司の指導のもと、横幕 真が担当した。付章 2 については、小林克也氏およびパレオ・ラボ AMS 年代測定グループより玉稿を賜った。全体の編集は横幕が行った。
7. 資料の検討にあたって、能美市立博物館と菅原雄一氏(能美市教育委員会)に御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高 (T.P.) で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として「石川県遺跡地図」の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目 次

I	位置と環境	1
II	ニツ梨豆岡向山遺跡群発掘調査 2 (遺物編 1)	13
	付章 1 その他の遺構	43
	付章 2 自然科学分析	45
	写真図版 1～24	
	報告書抄録	

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km²を測る。南は大日山(1368m)で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地(加越山地)は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5~10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したもののだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江湯・木場湯を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵限界で言えば、河田山遺跡(276)や八里向山A～F遺跡(300～305)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしよま A・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(37)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(198)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡(図郭外)、大長野A遺跡(210)、漆町遺跡(220)、荒木田遺跡(245)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(276)や八里向山A遺跡(300)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳、和田山5号墳(いずれも図郭外)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵限界では、中期後半以降、河田山古墳群(277)や下開発茶白山古墳群(図郭外)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみで構成される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(226)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(44)や御幸塚古墳(82)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(52)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石横積六式石室が採用される。

4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設けた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、近年調査が行われた松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～未だし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江柳川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。若潮城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張り図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯(108)で操業を開始し、湯上谷古窯跡群(143)で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯(図郭外)で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640(寛永17)年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡(194)が埋蔵文化財包蔵地(近世の町屋跡)として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野(現在の小松市河田町地内)で茶毘に付されたとされており、灰塚(264)が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯(235)に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯(186)、小野窯(263)などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括り而言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり(土百古墳:81)、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり(左門殿古墳:45)するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No	名	種別	時代	備考
1	樂山神社古墳	古墳	縄文	
2	樂山神社遺跡	その他(遺)	中世	
3	樂山神社遺跡	跡布地	不詳	
4	樂山遺跡	城跡跡	中世	
5	一宮A遺跡	跡布地	古墳～古代	
6	樂山古塚	古塚・集落跡	縄文	加賀市歴史館
7	樂山古塚	集落跡	古代	
8	樂山古塚遺跡(A地点)	古墳	弥生	樂山古塚遺跡A地点に所在する古塚
9	樂山古塚遺跡(B地点)	集落跡	古代～中世	樂山古塚に隣接する地点
10	法の上遺跡	跡布地	縄文	
11	佐野遺跡	稲塚	不詳	
12	三ツ木遺跡	跡布地	中世	
13	新橋遺跡	跡布地	不詳	
14	新橋遺跡	跡布地	古代(平安)	
15	龍橋遺跡	跡布地	縄文	
16	龍橋遺跡	集落跡	弥生～中世	
17	都もどり地蔵遺跡	跡布地	古代	
18	新橋遺跡	集落跡	縄文	
19	新橋遺跡	集落跡	弥生	
20	新橋遺跡	集落跡	古代	
21	分枝山古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分枝山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、古墳6
23	分枝山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳
24	分枝山遺跡	跡布地	縄文	
25	分枝山遺跡	跡布地	弥生	
26	分枝山遺跡	城跡跡	中世(安土桃山)	
27	分枝山遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	新宮山A遺跡	跡布地	不詳	
29	新宮山B遺跡	跡布地	縄文	
30	新宮山C遺跡	その他(築城)	古代(奈良)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
30	川津イ古遺跡	跡布地	古墳・中世	
31	川津A遺跡	跡布地	古代(奈良)	
32	熊耳B遺跡	跡布地	縄文	
33	熊耳神前A遺跡	跡布地	古墳～中世	
34	熊耳神前B遺跡	跡布地	縄文	熊耳B遺跡の一部
35	津和野遺跡	跡布地	縄文・不詳	熊耳B遺跡の一部
36	川津新遺跡	跡布地	縄文・古代	
37	志弘林遺跡	集落跡	縄文	
38	志弘南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田原遺跡	集落跡	古代(奈良)	
40	刀狩野遺跡	集落跡	古代～中世	
41	矢田A遺跡	跡布地	縄文	
42	矢田B遺跡	跡布地	古墳	矢田原遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	刀狩びそ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	刀門原古墳	古墳	古墳	円墳
46	新山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	熊宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	志弘塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	志弘山古墳	古墳	古墳	円墳、本誌第1号
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、弥生積極式石室、家形石棺
51	森森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田野新山古墳	古墳	古墳	円墳(14)、前方後円墳(3)、平明1、本誌第1号
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳(3)、前方後円墳(1)
55	矢田野エシロ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	熊輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	狩津石山古墳	古墳	古墳	円墳、弥生積極式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、弥生積極式石室
59	矢田野神前古墳群	集落跡	古代(平安)	
60	下栗津A塚古墳	横穴墓	不詳	横穴1～8
61	越塚塚	塚	不詳	
62	下栗津B塚古墳	横穴墓	不詳	横穴2
63	越塚	集落跡	弥生～中世	
64	越ヶ丘遺跡	跡布地	古代	
65	越ヶ丘遺跡	跡布地	古墳	方墳?
66	丹津A遺跡	跡布地	縄文	
67	丹津B遺跡	跡布地	縄文	
68	丹津C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	栗原遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カシヤマヤ遺跡	跡布地	古代(奈良)	
72	串カシヤマヤB遺跡	跡布地	古墳	
73	串カシヤマヤC遺跡	跡布地	古墳	
74	今江内A古墳群	跡布地	弥生	
75	飯山遺跡	集落跡	古墳	
76	土古遺跡	跡布地	縄文	
77	今江5日遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎塚古墳	古墳	古墳	
79	五郎塚古墳	古墳	古墳	
80	飯山古墳	古墳	古墳	
81	土古古墳	古墳	古墳	
82	鎌倉塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、中世石造定家塚
83	今江6日遺跡	横穴墓	不詳	横穴4
84	鎌倉塚遺跡	集落跡	中世	土器土倉輪の一部
85	串古遺跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	江上古遺跡	生産遺跡	古伊勢期	製瓦
87	江上遺跡	跡布地	古伊勢期	
88	浅江町古遺跡	土の輪の墓	中世末	船形定家塚
89	林野跡古跡	柱石跡	不詳	
90	林遺跡(林カシヤマヤ古墳群内)	生産遺跡	古墳	須原遺跡3、南加賀古墳跡北群
	林遺跡(林オオカズミ古墳群内)	生産遺跡	古墳	須原遺跡5、土師器区1、南加賀古墳跡北群
	林遺跡(林野跡跡)	生産遺跡	古代	製瓦跡1、製瓦跡4、掘り中2、掘り中2
91	伊津5-12古墳群	生産遺跡	古代(平安)	須原遺跡2、南加賀古墳跡北群
	伊津5-12古墳群	生産遺跡	古代(平安)	製瓦跡4、製瓦跡3
92	伊津古墳群跡	生産遺跡	古墳・中世(鎌倉)	須原遺跡30(5角築築5)、土師器区19、製瓦跡2、加賀1、南加賀古墳跡北群
93	伊津6ツツバ古墳群跡	生産遺跡	古墳	須原遺跡7、須原遺1、南加賀古墳跡北群
94	伊津1日遺跡	生産遺跡	古代(平安)	製陶
95	伊津ワケナニ遺跡	生産遺跡	不詳	製瓦跡1、製瓦跡1
96	伊津7ヨウツタニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須原遺跡1、須原跡1、南加賀古墳跡北群
95	伊津7日遺跡	生産遺跡	不詳	製瓦
95	伊津アサヤマ古墳跡	生産遺跡	不詳	製瓦
97	伊津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須原遺跡2、製瓦跡1、南加賀古墳跡北群
98	二ツ塚一箇山古墳群跡	生産遺跡	古代	須原遺跡12、土師器区28、製瓦跡1、製瓦跡2、南加賀古墳跡北群
99	二ツ塚二箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳・古代	須原遺跡4
100	二ツ塚三箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳～古代	須原遺跡12(横穴形築築2、瓦内築築2)、南加賀古墳跡北群
101	二ツ塚四箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳・古代(平安)	須原遺跡12(横穴形築築2)、土師器区3、土師器区3、南加賀古墳跡北群
102	二ツ塚五箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳	土師器区4、須原遺跡、南加賀古墳跡北群
103	二ツ塚六箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳	須原遺跡3、南加賀古墳跡北群
104	二ツ塚七箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳	須原遺跡8、南加賀古墳跡北群
105	二ツ塚八箇山古墳群跡	生産遺跡	古墳	須原遺跡5、南加賀古墳跡北群
106	二ツ塚九箇山古墳群跡	生産遺跡	古代(奈良)	須原遺跡1、製瓦1、須原遺1、南加賀古墳跡北群
107	二ツ塚十箇山古墳群跡	生産遺跡	古代(奈良)	須原遺跡1、製瓦1、南加賀古墳跡北群

No	名 称	種 別	期 代	備 考
108	ツルギの古銅鏡	古銅鏡跡	古代(平安末)	兵庫県産2、加賀産1、南加賀古銅鏡土器
109	ツルギ鍔1～2号鉄鏡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
110	ツルギ鍔古銅鏡跡	古銅鏡跡	古代	兵庫県産6(山内書真1)、南加賀古銅鏡土器
111	ツルギ鍔イロハ古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	兵庫県産2、南加賀古銅鏡土器
112	矢野田山古銅鏡跡	古銅鏡跡	古代(奈良)	兵庫県産6、南加賀古銅鏡土器
113	矢野田長尾古銅鏡	古銅鏡跡	古代(奈良)+中世(鎌倉)	兵庫県産4、加賀産2、鉄鏡3、南加賀古銅鏡土器
114	飯沢トウヤキヤナ古銅鏡跡	古銅鏡跡	古代(奈良)+中世(鎌倉)	兵庫県産6、加賀産2、南加賀古銅鏡土器
115	飯沢A遺跡	跡地	中世	
116	飯沢B遺跡	跡地	中世	
117	中大上谷1～2号銅鏡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	加賀産2
118	中大上谷イロハ古銅鏡跡(天立山1号鉄鏡跡)	古銅鏡跡	不詳	加賀産1
119	中大上谷2～3号鉄鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
120	大久保谷1～2号鉄鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
121	大久保山古銅鏡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
122	都谷1号銅鏡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	加賀産
123	矢野田オナツツゾニ鉄鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡3
124	矢野田1～2号銅鏡	銅鏡	不詳	
125	都谷1～3号銅鏡	銅鏡	不詳	
126	都谷6号銅鏡	銅鏡	不詳	
127	都谷中山古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡3
128	上飯沼スエデン古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
129	上飯沼ジャモンゾニ遺跡	古銅鏡跡	古代(平安)	兵庫県産4、鉄鏡3、南加賀古銅鏡土器
130	上飯沼ヤマヤマニ遺跡	古銅鏡跡	古代(平安)	兵庫県産4～5、鉄鏡2、銅片1、地下式石1、南加賀古銅鏡土器
131	上飯沼アマツアズニヤマ古銅鏡跡	古銅鏡跡	古銅・古代(奈良)	兵庫県産4、南加賀古銅鏡土器
132	上飯沼ヤマヤマ遺跡	古銅鏡跡	古代(奈良)	兵庫県産2、南加賀古銅鏡土器
133	上飯沼トウヤキヤナ古銅鏡跡	古銅鏡跡	古代(奈良)+中世(鎌倉)	兵庫県産4、加賀産2、鉄鏡1、南加賀古銅鏡土器
134	上飯沼シノヤマ古銅鏡跡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	加賀産4、鉄鏡1
135	伊津1～2号鉄鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
136	伊津本遺跡跡	柱石跡	中世(室町)	
137	伊津本遺跡址遺跡跡	跡地	古代+中世	
138	上飯沼形1遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡1
139	飯沼ニヤマ遺跡	古銅鏡跡	古代(平安)	兵庫県産1、鉄鏡1、南加賀古銅鏡土器
140	飯沼多ニヤマ遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡1
141	上飯沼クジョウヤマ遺跡	古銅鏡跡、柱石跡、礎石	古代(平安)+中世	兵庫県産5、鉄鏡1、礎石、南加賀古銅鏡土器
142	上飯沼ハクタンニ古銅鏡跡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	加賀産2
143	飯上谷古銅鏡跡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	加賀産10、鉄鏡2
144	内飯沼ヤマヤマ古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
145	飯沼上谷イロハカタナク古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
146	飯沼トウヤキ遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
147	飯沼中飯沼跡	礎石	中世(鎌倉)	柱石礎石礎石
148	山口田トヤマ古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡3枚
149	山口田神古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
150	山口田エドウ古銅鏡跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
151	山口遺跡	跡地	不詳	
152	飯沼(飯沼)遺跡	礎石	中世(鎌倉)	
153	飯沼倉庫トツ遺跡	礎石	中世(室町末)	地下式石2、基礎石
154	大谷山遺跡	土層	縄文	
155	小山田コガタニ遺跡	跡地	不詳	鉄浮跡
156	小山田スギトニ遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
157	小山田オクサマニ遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡2
158	津波森ウツマイニ遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡1、製鉄遺物
159	本場山遺跡	古銅	古銅	伊賀4
160	本場山遺跡	古銅	古銅	
161	本場山遺跡	銅鏡跡	不詳	地中で御山跡とされる
162	本場山遺跡	跡地	縄文	
163	本場A遺跡(本場遺跡B地区)	古銅鏡跡	古代(奈良)	鉄鏡1、製鉄2
164	本場B遺跡	跡地	古代(平安)+中世	
165	本場C遺跡	跡地	弥生	
166	本場遺跡A地区(1号遺跡)	古銅鏡跡	古代(平安)	鉄鏡3、鉄浮跡
167	本場遺跡A地区(2号遺跡)	古銅鏡跡	古代(平安)	鉄鏡2、製鉄2
168	本場遺跡C地区(1号遺跡)	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
169	本場遺跡D地区(4号遺跡)	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡1、製鉄1
170	本場遺跡E地区(5号遺跡)	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
171	本場遺跡F地区(6号遺跡)	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
172	本場遺跡G地区(7号遺跡)	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡
173	本場遺跡H地区(8号遺跡)	銅鏡	不詳	銅片
174	山田遺跡	跡地	不詳	鉄浮跡
175	長谷田遺跡の山田遺跡	跡地	不詳	鉄浮跡
176	谷遺跡	跡地	縄文	
177	谷古遺跡	跡地	弥生+古銅	
178	谷古谷遺跡	不詳	不詳	遺石又は塚
179	谷古谷遺跡	築造跡	古代+中世	
180	谷古谷遺跡	古銅鏡跡	不詳	鉄鏡1、鉄浮跡
181	浪行古遺跡	跡地	不詳	小塚遺物
182	浪代寺上コンヤマ遺跡	古銅鏡跡	中世(鎌倉)	鉄鏡1、製鉄1
183	浪代寺グッシュワン遺跡	古銅鏡跡	古銅	加賀産3、鉄浮跡
184	浪代寺A遺跡	跡地	不詳	鉄浮跡
185	浪代寺遺跡	古銅鏡跡	古銅	鉄鏡
186	浪代寺遺跡	古銅鏡跡	古銅末	西興古谷「浪代寺遺」
187	浪代寺遺跡	古銅鏡跡	古銅初期	橋本遺
188	浪行古遺跡	柱石跡	中世	山内書真書「浪行古」比定地
189	安七遺跡	土の礫	不詳	都府定跡
190	安七石古神ノ遺跡	跡地	不詳	
191	安七中飯沼遺跡	その他(礎)	中世(室町)	
192	安七上塚古遺跡	不詳	不詳	礎石塚と石積の礎石とも、礎石せず
193	小坂城跡	城跡	古銅	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部、本丸跡は小坂城指定遺跡
194-1	穴山遺跡	銅鏡跡	古銅	正居小坂城下町一帯の町内町界

No	名 称	種 別	時 代	備 考
194-2	東町遺跡	井戸跡	古墳	古墳(小形塚)下。東町の東尾跡
195	中町遺跡	生産遺跡	中世(室町)	跡地
196	多木野(境内)遺跡	跡地	中世(室町)	埋没瓦葺土庫
197	本町遺跡	堀跡跡		本町(旧)跡跡(本町東一)
198	八口小池方遺跡	跡地	縄文・中世	
199	上小池遺跡	跡地	弥生	埋没集落
200	種山(北)遺跡	跡地	古代(平安)	
201	種山(南)遺跡	跡地	弥生	種山に分離された右岸側包蔵地
202	新田 A 遺跡	跡地	弥生	種山に分離された右岸側包蔵地
203	新田 B 遺跡	跡地	古墳・古代	
204	新田遺跡	堀跡跡	中世(室町)	
205	西原遺跡	跡地	弥生～古代	
206	種遺跡	集落跡	中世	一向一揆・種山(七期)集落区画(東端)
207	北原遺跡	跡地	弥生～古代	
208	長田遺跡	集落跡	中世(室町)	
209	長田南遺跡	集落跡	弥生～古代(平安)	
210	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野 B 遺跡	跡地	不詳	
212	平高野(西)遺跡	集落跡	古代(平安)	
213	千代オオキツ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	千代ウツシ遺跡	集落跡	縄文・中世	
215	平高野(東)遺跡	集落跡	弥生	種山に分離された右岸側包蔵地
216	平高野 B 遺跡	跡地	弥生	種山に分離された右岸側包蔵地
217	山口種山遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	山口塚遺跡	堀跡跡	中世(室町)	(山口)集落(包蔵地)区画
219	山口遺跡	跡地	古墳～中世	埋没遺跡の一部
220	種山遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一軒遺跡	跡地	縄文	
222	一軒 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一軒 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定塚遺跡	井戸跡	中世(室町)	
225	千代・東天遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	千代オオキツ遺跡	跡地	縄文～弥生	
227	千代小野(西)遺跡	集落跡	弥生～中世	
228	千代塚遺跡	堀跡跡	中世(室町)	
229	千代本村遺跡	跡地	古墳	
230	種地遺跡	跡地	縄文	
231	種々小遺跡	集落跡	古代	種(氏)跡(包蔵)
232	種々オオツツツ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	種々オオツツツ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	跡地	古代	
235	打越遺跡	生産遺跡	近世末	西興九谷「打越」遺跡(式笠)
236	古竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	古竹 B 遺跡(古竹遺跡 19 地区)	跡地	古墳	新河邊(古竹)
238	古竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千本野遺跡	跡地	縄文	
240	千本野(北)遺跡	古墳	古墳	古墳 8
241	千本野(南)遺跡	集落跡	古墳	古墳
242	種生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳。遺存するのは根代(残土のみ)
243	種生 2 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の西隣
244	種生 3 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
245	種生 4 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
246	種生 5 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
247	種生 6 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
248	種生 7 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
249	種生 8 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
250	種生 9 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
251	種生 10 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
252	種生 11 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
253	種生 12 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
254	種生 13 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
255	種生 14 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
256	種生 15 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
257	種生 16 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
258	種生 17 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
259	種生 18 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
260	種生 19 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
261	種生 20 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
262	種生 21 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
263	種生 22 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣
264	種生 23 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の東隣
265	種生 24 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の南隣
266	種生 25 号墳	古墳	古墳	種生 1 号墳の北隣

No	名	地	種別	時代	備	考
267	福田ヒギンタン遺跡	遺布地	不詳			
268	福田ウラム平遺跡	遺布地	古代～中世			
269	福田アムクワ遺跡	遺布地	古墳			
270	竹谷野原遺跡	遺布地	縄文・中世(早期)			
271	福田遺跡	遺布地	古代			
272	福田塚	不詳	不詳			
273	福田地山古墳群	古墳	古墳		円墳9, 本相遺跡, 本志助十室	
274	福田山古墳群	古墳	古墳		円墳12, 方墳4	
275	鎌井池末古墳	古墳	古墳		円墳	
276	河田山遺跡	遺布地	釘石器～縄文			
		縄石器	縄文		高井性重跡, 河田山10～12号遺分集跡	
		その他の墓	古代(奈良)		丸墓, 河田山1号墳の西側に所在	
277	河田山古墳群	古墳	古墳		前方後円墳2, 前方後方墳2, 円墳22, 方墳34, 平明1, 本相遺跡, 本志助十室, 切石墓群六式古室	
	河田橋穴	縄穴墓	不詳		地下式墳, 河田山54号墳の南に所在	
278	河田山1号遺跡	生産遺跡	古代(奈良)		筑紫郡築, 藤葉古説神曲敷 八里・河田山支那, 河田山60号墳の北西側に所在	
	河田山古墳群	生産遺跡	不詳			
279	河田山遺跡	遺布地	縄文・古代(奈良)			
280	河田C遺跡	遺布地	不詳			
281	上八里集行遺跡	縄穴墓	不詳		地下式墳6, 縄穴1, 平明1, 3地点で円8墓	
282	上八里集行遺跡	縄穴墓	不詳		縄穴2墓	
283	上八里集行遺跡	縄穴墓	中世(早期)		縄穴11墓	
284	上八里中世集行遺跡	その他の墓	中世(早期)			
285	上八里上遺跡	遺布地	縄文・古代(平安)			
286	上八里中遺跡	遺布地	古代(奈良)			
287	上八里C遺跡	縄穴墓	古墳		縄穴2墓	
288	上八里中遺跡	遺布地	古代(奈良)			
289	上八里1号遺跡	生産遺跡	古代(奈良)		筑紫郡築, 藤葉古説神曲敷 八里・河田山支那	
290	上八里2号遺跡	生産遺跡	不詳		地下式式墳, 藤葉古説神曲敷 八里・河田山支那	
291	石内橋穴	不詳	不詳			
292	河田山遺跡	遺布地	縄文・中世			
293	宇田池遺跡	遺布地	不詳			
294	長野A遺跡	遺布地	弥生			
295	長野B遺跡	遺布地	古墳			
296	長野八反田遺跡	遺布地	古代			
297	長野神社前遺跡	遺布地	古代(平安)			
298	河田地山下遺跡	遺布地	縄文・古代(平安)			
299	河田地山古墳群	古墳	古墳		円墳7	
300	八里南A遺跡	集落跡	縄文			
		集落跡	弥生		高井性重跡	
301	八里南B遺跡	遺布地	釘石器～縄文			
		釘石器	古代(奈良)		加賀郡御・国分寺河田山神社境内の一	
		その他の墓	古代(奈良)			
302	八里南C遺跡	集落跡	弥生			
		古墳	古墳		前方後方墳1, 本相遺跡	
303	八里南D遺跡	遺布地	釘石器～縄文			
		集落跡	弥生～古墳			
		古墳	古墳		方墳2, 本相遺跡	
304	八里南E遺跡	遺布地	釘石器～縄文			
		古墳	古墳		方墳1	
		集落跡	古代			
305	八里南F遺跡	遺布地	縄文			
		古墳	古墳		円墳10, 本相遺跡	
		その他の墓・縄穴墓	中世(早期)		集石墓1, 縄穴3	
306	八里南G遺跡	遺布地	弥生・古代(平安)			
307	八里南H遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)		集石墓群, 96 集落跡	
308	八里南I遺跡	生産遺跡	古代(奈良)		筑紫郡築, 藤葉古説神曲敷 八里・宮行支那	
309	八里南J遺跡	生産遺跡	古墳		筑紫郡築, 藤葉古説神曲敷 八里・宮行支那	
310	栗田山遺跡	生産遺跡	不詳		栗田山遺上, 栗田山遺下	
311	栗田山遺跡	生産遺跡	不詳		栗田山	
312	栗田C遺跡	生産遺跡	不詳		栗田山	
313	栗田D遺跡	遺布地	縄文			
314	栗田E遺跡	釘石器	古代(平安)		加賀郡御・国分寺河田山神社境内の一	
315	栗田F遺跡	釘石器	古代(平安)		加賀郡御・国分寺河田山神社境内の一	
316	栗田G遺跡	遺布地	不詳			
317	藤葉寺・ウラタキ遺跡	遺布地	古代(平安)～中世			
318	藤葉寺・ウラタキ遺跡	遺布地	古代(平安)～中世			
	文明寺古墳群	生産遺跡	古代(平安)		釘石(縄石)・又は銅器, 本地	
	文明寺古墳群	古墳	古墳		筑紫郡築(丸形築)	
319	藤原寺跡	釘石器	古代(平安)		古代遺物の可能性も	
320	藤葉寺遺跡	遺布地	縄文		中宮八郎, 藤葉ある伝承地の一	
321	別の集落集跡	その他の墓	(平安)		遺跡4, 3号墳跡, 2号は鎌倉時代に移築に利用された?	
322	藤葉寺跡	釘石器	古代(平安)		中宮八郎, 藤葉ある伝承地の一	
323	藤葉寺跡	釘石器	中世(早期)		一宮一殿・宇田池跡の古説神ととも	
324	藤田遺跡	集落跡	不詳		一宮一殿・宇田池跡の古説神ととも	
325	藤田橋穴	不詳	不詳		地下式?!	
326	弘大寺(北)寺跡	釘石器	中世			
327	弘大寺(南)寺跡	古墳	古墳			
328	弘大寺跡	釘石器	中世			
329	弘大寺跡	釘石器	中世			
330	アッシュクワマ古墳群	古墳	古墳		円墳2, 本志助十室	
	中野B遺跡	集落跡	古墳～中世			
331	(北) 長尾寺跡	釘石器	古代(平安)		中宮八郎, 藤葉ある伝承地の一	
332	中野C遺跡	遺布地	古代(平安)～中世			
333	中野遺跡・河田遺跡	遺布地	縄文			
	河田上野遺跡	遺布地	釘石器			

No	名 称	種 別	時 代	備 考
334	日蓮寺中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤坂宮土藏跡	踏込地	縄文	
336	松の木の宮石ノ宮	平野	平野	存在自体が不明、3 基間1とされる
337	赤坂宮土ノ木宮石ノ宮	縄文遺	平野	縄文3、地下式部4
338	聖徳寺跡	社寺跡	古代(平安)	中世八国
339	日宮神社跡	神社跡	中世	
340	松ヶ丘城跡	城跡跡	中世	
341	長藤宮西院跡・長藤南院	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
342	美土遺跡	踏込地	縄文	
343	松の木の宮跡	その他の墓	中世	
344	平野ノ宮の跡	縄文遺	平野	縄文3
345	宇野遺跡	城跡跡	中世(室町)	
346	雄の木土遺跡	踏込地	縄文	
347	日宮寺跡	社寺跡	平野	中世八国
348	藤岡寺跡	社寺跡	古代(平安)	中世八国
349	松谷観音寺跡	社寺跡	古代(奈良)	春日山遺跡に遷る古代仏教寺院
350	平野寺跡	城跡跡	中世(室町)	中世八国
351	江高城跡(山崎山形跡)	城跡跡	中世(室町)	一向一揆・平野監国城址遺地
352	蓮花寺跡	社寺跡	平野	中世八国
353	渡辺谷遺跡	踏込地	中世(室町)	
354	渡辺谷城跡	城跡跡	中世(室町)	一向一揆・宇野山内渡辺谷城址
355	渡辺谷城跡(石ノ)	社寺跡	中世(室町)	
356	渡辺谷城跡(遺)	縄文遺	平野	縄文13、地下式部5
357	麻呂原谷遺跡	踏込地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世(室町)	
359	大杉山城跡	縄文遺	平野	縄文3
360	こたけ谷城跡	縄文遺	平野	縄文1
361	了山城跡	縄文遺	平野	縄文1
362	福成城跡	城跡跡	中世(室町)	
363	松山城跡	踏込地	平野	縄文1
364	赤坂城跡	踏込地	縄文	
365	寺ノ原遺跡	踏込地	縄文	ほかにも等閑跡の伝承あり
366	観音下城跡	城跡跡	平野	
367	和泉山宮石遺跡跡	平野遺跡	古代(平安)	土蔵形跡成立、雄美古説神由跡 鳩山の支跡
368	和泉山宮石2号遺跡	平野遺跡	古代(奈良～平安)	和泉山遺、雄美古説神由跡 鳩山の支跡
369	和泉山和泉宮跡	平野遺跡	古代(平安)	和泉山遺、雄美古説神由跡
370	和泉山宮跡	平野遺跡	古墳	
371	和泉山1号遺跡	踏込地	縄文	
372	和泉山2号遺跡	城跡跡	平野	
373	和泉山和泉宮跡	平野遺跡	平野	和泉山遺、雄美古説神由跡 鳩山の支跡
374	徳守城城跡	城跡跡	中世	
375	徳守城土城ノ宮	縄文遺	平野	
376	寺谷古遺跡	平野遺跡	平野	和泉山遺、雄美古説神由跡
377	寺谷新田古遺跡	古遺	古遺	
378	観音寺跡	社寺跡	平野	
379	観音寺中世墓跡	その他の墓	中世	
380	観音城跡	縄文遺	平野	
381	観音寺跡	城跡跡	平野	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986) 漆町遺跡Ⅰ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 漆町遺跡Ⅱ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 白江梯川遺跡Ⅰ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅲ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅳ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 白江梯川遺跡Ⅱ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ, 石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990) 小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995) 石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ, 石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ, 石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ, 石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ, 石川県能美市

- (財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山山谷西谷窯跡, 石川県能美市
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
- 石川考古学研究会 (1988) 石川県城跡分布調査報告
- ウ 上野 興一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
- 小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡, 薬師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶白山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶白山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第二章 二ツ梨豆岡向山窯跡群 2 (遺物編 1)

はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』(小松市教委 2015)にて遺構編を報告した「二ツ梨豆岡向山窯跡群 2」の遺物編 1 にあたる。報告遺物は 4 号窯(4-Ⅰ号窯及び 4-Ⅱ号窯)関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委(2015)を参照されたい。

付章として、その他遺構の一部(SK02・SK03)と、2 次調査(小松市教委 2005)及び 3 次調査(今報告)で出土した炭化材の自然科学分析結果を報告する。自然科学分析については、小林克也氏およびバレオ・ラボ AMS 年代測定グループの御協力により玉稿を賜った。記して感謝の意を表したい。

【凡例】

1. 遺物の器種分類と編年

須恵器・土師器ともに、北陸古代土器研究会で使用のものに準じ、第 5 図の通り設定した。貯蔵具に関しては、北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究 8 号』に基づいたものである(ただし蓋 A・蓋 B および蓋 D・蓋 E は区分していない)。

土器編年と暦年代は、田嶋明人の古代土器編年軸(田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』及び 1997「加賀地域での 10・11 世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の 10・11 世紀代の土器様相』)に基づいて、望月精司氏が示した編年軸と細分案に準じる(望月精司 2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」『二ツ梨一貫山窯跡』及び 2005「第 8 章 窯一能美窯跡群の 8 世紀後半～9 世紀中頃の須恵器編年と窯跡動向」『和気後山谷窯跡群』、2009「南加賀地域古代土器編年軸と暦年代」『顔見町遺跡 IV』)。

近年、古代 V 期を若干遅らせた暦年代(2010「南加賀地域古代土器編年軸と三瀬台編年、暦年代」『顔見町遺跡 V』)が提示されているが、今報告では従来のもを踏襲する。

2. 遺物図版について

- 縮尺は食膳具と焼台 1/3、貯蔵具と煮炊具 1/4 を基本とする。
- 掲載番号と「実測図番号」を併記。
- 須恵器は断面黒塗、土師器は断面白抜き。
- 粘土境や焼台片等付着物は断面斜線パターン、赤彩は黒 20%塗。
- 「▼」を正中線上に付すものは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と焼線・調整線等が離れているものは、ゆがみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す。
- 底部に回転系切痕をもつものは「●」を付す。
- その他特徴的な調整は観察表に付記した。

3. 遺物観察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点：取上げ詳細：出土した調査区及び遺構名・グリッド名を示し、「窟床」「窟灰層(壁口前面土坑)」「窟向底状平内」「灰原」「窯頂上」「SK01」の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。なお表土や盛土からの出土など 2 次堆積の可能性が高まるものには()を付す。

法量：「口」=口径、「底」=底径、「台」=高台径、「脚」=脚部径、「胴」=胴部最大径、「頸」=頸部径、「つ」=つまみ径、「高」=器高、「台高」=高台高、「頸高」=頸部高、「つ高」=つまみ高、「頸高」=頸部高で示し、()は残存値、[]は推定復元値を表す。単位は cm に統一した。

性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「転」は主に 2 次焼熟痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅緻」=焼き締まりが非常に強いもの、「良好」=焼き締まりが強いが堅緻より弱いもの、「良」=還元状態を保つて焼き締まりが強いもの、「やや良・やや不良」=「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」=白い生焼け状態のもの(生)や酸化状態の焼成不良で軟弱のもの(醜)をそれぞれ示す。

色調：降灰部分、釉付着部分を除いた最大な色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は適宜降灰や釉の色調も示した。色調の判別は以下のとおりマンセル色系系に準拠して表記する。白色～N8(生焼け品)、灰白色～N8、灰色～N7～5、灰オリブ色～5Y6/1～4/1、明青灰色～5PB7/1 あるいは 5P7/1、青灰色～5PB6/1～5/1 あるいは 5PB/1～5/1、暗(青)灰色～N3 あるいは 5PB4/1～3/1、褐色～7.5YR6/1～4/1、(明)赤灰色～2.5YR7/1～6/1 あるいは 2.5YR7/2～6/2(酸化焼成品)、ほか例外となる色調はその都度付記した。

胎土：「通常」=南加賀窯跡群の「津オオダニ支所遺構」で通常見られる、粘土質の素地に適度な砂粒(粒径 2mm 未満)が混在し、まれに礫粒(粒径 2mm 以上)を含む胎土。「砂少」=砂粒の混入が少なく比較的良質な粘土質胎土。「砂(礫)多」=通常の胎土よりもやや砂粒や礫粒が多い胎土。「礫極多」=炭化材と呼ばれる大粒の礫を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率(36 分率)を示す。他の部位で示す場合は胴・底、台、脚等を数値に付記する。

回転：ロクロ回転の方向がヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の観察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

- 底部糸切り=糸切りがある場合に記す。ヘラ切りの場合は特に記さない。
- ヘラケズリ=部位を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「ケズリ」と記す。
- ヘラ記号=部位と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ

書き)。

- 重ね焼き分類一坏B焼成道跡の分類。北野博司1988「重焼の観察」『辰口西部遺跡群1』に基づく(1類一蓋身正位組合せ重ね焼き、IIa類一蓋逆位と身正位の組合せ重ね焼き、IIb類一蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、III類一蓋および身の柱状重ね焼き)。対象は有蓋器種(坏B)だが、無蓋器種(坏A・盤A・盤B)についてもIII類が観察されたものは付記する。
- タタキ分類一貯蔵具の胴部成形や調整の際に生じる叩き具・当て具道跡の分類。花塚信雄1984「須恵器焼類叩き目文について」『金沢市畷田・寺中道跡』に基づく。

- 頸部接合分類一瓶類の頸部接合法は「和気後山谷窯跡群」(2005)に倣い、A類(風船技法)とB類(開口法)に大別し、A類は3細分した(A1類一大円蓋閉塞、A2類一中円蓋閉塞(円蓋痕見えるタイプ)、A3類一小円蓋閉塞(円蓋痕見えないタイプ)もしくは円蓋閉塞しない絞り切り)。

※観察箇所を示す場合、(部位) - (内面・外面) - (上半・下半)の順に略して記載

第1節 4号窯関連遺物の概要

調査区A区に4号窯とSK01が位置し、A区からD区にわたって灰原が広がる。灰原は後世の切土・盛土によって攪乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲(か3〜か5グリッドおよび、き3〜き5グリッド)を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、攪乱による2次堆積の可能性をもつものが含まれている。SK01は遺構編で窯作業時に伴う土取り場・製品や燃料の置き場・廃棄場の機能を想定した。窯埋土から出土した遺物は作業後の埋没・廃棄品と考えられる(調査区の位置は第24図参照)。

4号窯は遺構編で9世紀前半代に位置づけたが、今報告の遺物報告をもって詳細な時期を確定したい。灰原を含む調査区D区の表土や標高の低い地点には5・6・13号窯由来と考えられる時期の新しい遺物が混ざるため、それらの遺物は極力除外した。

SK01は基本的に4号窯に伴う遺物が主体だが、窯作業時期より新しいVI期以降の内黒埴Bや鉢B(括れ鉢)を確認している。おそらく作業後も廃棄場として機能したと推測されるものだが、今報告では除外した。

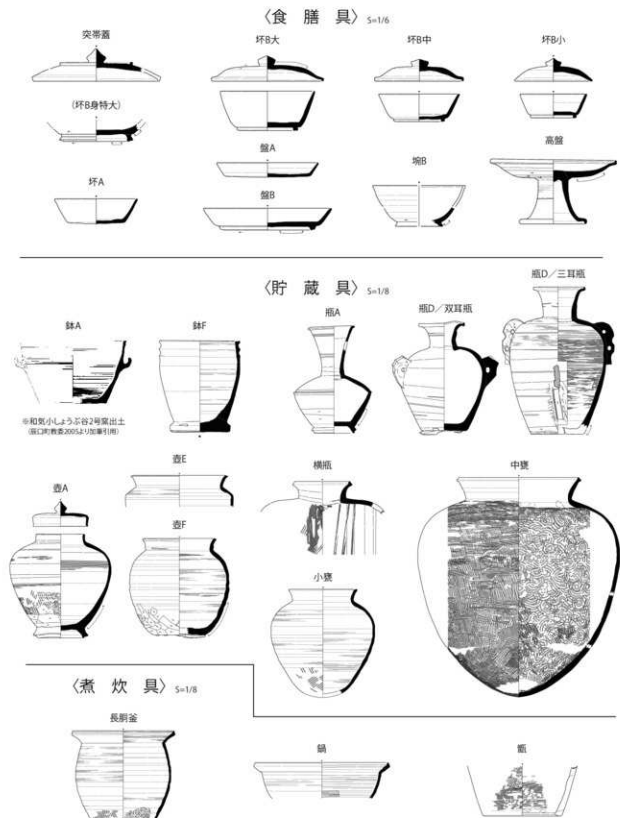
遺物の出土量はパンケース(64.5cm×37.5cm×14.5cm)に換算すると、凡そ窯体内出土遺物(窯床・窯灰層・舟底状ビット)が4箱、灰原・窯埋土出土遺物が100箱弱、SK01が2箱である。遺物の接合状況は、窯灰層-灰原-窯埋土-SK01の間で複数認められているが、窯床面と他地点の接合は1点のみ調査区表土との接合を除いて確認していない(詳細は本章末尾の観察表参照)。

第2節 器種構成と各器種について

器種構成表(第2表)に示したように、出土遺物は高火度還元焼成の須恵器食膳具が約90%を占め、貯蔵具と煮炊具が伴う。煮炊具は低火度酸化焼成の土師器器種であるが、須恵質と土師質のものが存在するため、構成表に加えた。表に示したものの以外に埴B・小型貯蔵具・赤彩土師器埴A・貯蔵具専用焼台が出土しているが、極わずかであるため計測対象から除外し、特殊品として別に扱った。また、坏Bは蓋の計測値を採用し、有蓋の壺Aにつく壺蓋は除外した。



第4図 出土地点概略図



第5図 器種分類図

参考文献（第Ⅱ章および付章1）

小松市教育委員会 1975『戸津5号窯跡（概報）』

小松市教育委員会 1991『戸津古窯跡群1』

石川県埋蔵文化財保存協会 1993『小松市林道跡』

石川県埋蔵文化財センター 1999『辰口町上徳山谷山西谷窯跡』

小松市教育委員会 2005『小松市内道跡発掘調査報告書1』

辰口町教育委員会 2005『和気後山谷窯跡群』

小松市教育委員会 2015『小松市内道跡発掘調査報告書 XI』

※凡例で記載したものは一部省略

食膳具は底部回転ヘラ切り器種で占められ、環 A と盤 A が合わせて 70%以上にのぼり、これに環 B と盤 B が伴い、わずかに高盤が含まれる。貯蔵具は壺瓶類が主体で、これに甕類が伴い、わずかに鉢類と横瓶が含まれる。煮炊具の約 90%は（長胴）釜で、鍋と甑は個体数でわずかに 1 個体のみの出土である。なおこれら各器種の中には、焼色が白色系で堅緻に焼かれる一群が少量存在する。

参考までに窯体内の器種構成表を第 3 表に示した。全体の構成と同じく食膳具主体であるが、この中には焼台（置台）転用品が多く含まれ、貯蔵具（瓶台部・壺口縁・甕胴部）転用品もみられた。詳細は確認していないが、壁床修復材として利用されたものも一部含まれると思われる。以下、各器種の概要を述べる。

第 2 表 全体器種構成表（口縁部計測値総計 17,509 / 36）

器種	環 B (蓋・身)		環 A	盤 A	盤 B	高盤	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	蓋 1,843	身 1,492	6,432	5,339	2,306	118	16,038
占有率	11.5%		40.1%	33.3%	14.4%	0.7%	91.6%
器種	鉢類	瓶類 (瓶 D 内訳)	壺類	横瓶	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値 (/36)	20	506	(251)	606	20	218	1,370
占有率	1.5%	36.9%	(17.9%)	44.2%	1.5%	15.9%	7.8%
器種	釜	鍋	甑・底径	煮炊具計			
口縁部計測値 (/36)	90	5	6	101			
占有率	89.1%	5.0%	5.9%	0.6%			

第 3 表 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,546 / 36）

器種	環 B (蓋・身)		環 A	盤 A	盤 B	高盤	食膳具計	貯蔵具計	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	68	46	558	558	232	35	1,451	88	7
占有率	4.7%		38.5%	38.5%	16.0%	2.4%	93.9%	5.7%	0.5%

1 食膳具

〈**金属器系有蓋器種 (1・2)**〉 天井部を巡る突帯や高い宝珠形のつまみをつける金属器系の蓋（突帯蓋）が特徴的である。器種構成表では環 B 蓋に含めた。全体の器形が分かるものはわずかであるが、2 法量（20cm 以上と 20cm～19cm 間）が存在し、ヘラケズリや厚く降灰する点など優品として生産されたものと考えられる。この蓋に伴う身は特定できていないが、環 B 身として掲載した中で台部高く踏ん張り、体部から底部をヘラケズリするシャープなつくりのもの（45）が候補としてあげられる。〈**環 B (3～74)**〉 蓋口径から法量分化を見ると、19cm 未満 14.5cm 以上を大、14.5cm 未満 12.5cm 以上を中、12.5cm 未満を小の 3 法量に分けられる。19cm 以上の確実な特大法量は確認できておらず、前述の金属器系器種があてはまるのかもしれない。大法量と中小法量の境目は明確で、中法量と小法量の境目は近接するが、小法量は口縁部折り曲げの無いタイプ（39～42）として作り分ける傾向にある。金属器系器種（特大法量）を含めて大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大と小がそれぞれ約 10%、大が約 50%、中が約 30%となる。

蓋は乳頭状つまみ（8）や偏平つまみ・偏平器形（15・24・25・37）の古いタイプに、高い宝珠形つまみ（14・29）や、天井部丸味を帯びて器高が高く口縁部端がつぶれて外屈傾向にある（13・14・16）新しいタイプが伴う。天井部ヘラケズリ率は実測個体数中で 55%。

身は蓋よりも口径が 1～1.5cm 程小さくなるサイズで、体部外傾化傾向にある。前述の金属器系

器種と推測される特大の台部(45)があり、壺瓶類台部を思わせるがっしりとしたつくりをしている。それ以外にも大分量の中に金属器系器種の影響と考えられる太く高い台部(台高0.9～0.8cm)があり、体部下半～底部をヘラケズリするもの(46)や径高指数54の超深身になるもの(47)がある。一般的な大分量は台高0.5cm前後に径高指数37～45程で、中には台径小さく口縁が大きく開く塊形指向タイプ(59)が存在する。61は体部にヘラ描きを施す。中小分量は径高指数32～37の大分量よりもやや偏平器形となるものが主体である。底部ヘラケズリは大分量のみにみられ、実測個体数中で約19%にとどまった。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数109点中で、I類41点(38%)、IIa類53点(49%)、IIb類15点(14%)とIIa類がやや多くI類がそれに次ぐ。以下の無蓋器種は身のみを重ねるIII類となる。**〈坏A(75～123)〉** 口径12～14cm前後、径高指数21～30主体の1法量。器形は底部厚く丸みを帯びて立ち上がる一群(88～94)とやや外反する一群(80・81・86・95～101)の古いタイプと、底部薄く体部外傾する新しいタイプ(76・77・118～123)がある。後者のタイプは底部小さい深身器形とやや偏平器形に分けられる。

〈盤A(124～173)〉 口径は概ね15～18cmに分布する。坏A同様に体部外傾化傾向にあり、体部長く伸びるタイプが主体である。これに底部から丸く立ち上がる一群(135～139)、体部やや短く立ち上がる一群(140～144)といった古いタイプが伴う。底部ヘラケズリは1個体確認(124)。

〈盤B(174～192)〉 口径は概ね19～23cmに分布する。坏A・盤A同様、体部外傾化傾向にあり、外傾化が著しいものもある(174・175)。これに体部が立ち気味となる古いタイプ(176・179～182)が伴う。底部ヘラケズリは盤Aに比べて多く、実測個体数中で約63%を占める。

〈塊B(193)〉 口径14.5cmの施釉陶器模倣器種で1個体のみ確認。図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、深身で体部内湾して口縁端部が外反する器形である。体部上半にはロクロヒダが残り、下半にヘラケズリを施す。底面のヘラケズリは残存部位から確認できなかった。焼色は灰白堅緻で、口縁端部が黒化し、内面には台部片が軸着することから、重ね焼きIII類と判断される。

〈高盤(195～199)〉 盤器形に脚部のつく器種。盤部は全て口径20cm前後の杯蓋逆転器形を呈し、ヘラケズリを施す。脚部は太く短いタイプである。

2 貯蔵具

〈鉢類(200～205)〉 鉢Aと鉢Fを確認しており、後者が主体である。鉢Aは把手1点のみの確認(205)で、窯土が付着し破面が研磨されていることから、窯道具への転用が考えられる。鉢Fは容量2.5ℓ程で、やや内湾気味に立ち上がる器形である。200・202・203で底部糸切り痕が確認され、202～204の底面および底側面にはヘラ先刺突が施される。

〈瓶類(206～227・256)〉 瓶A、瓶D、横瓶を確認し、瓶Dが瓶類全体の約半数を占める(残りの半数は瓶A主体で、なで肩球形となる明確な瓶Bは確認できていない)。瓶Aは容量1ℓ程の肩張り長頸台付器形である。口縁端部は面取り風のナデ仕上げ(206)と外屈(207・208)の2つがあり、口頸部は長く外反する。胴部下半はヘラケズリを施すものもある。瓶Dは耳付きのなで肩平底器形である。耳は双耳主体で三耳が伴い、1穴穿孔が主体である。容量は2ℓ代(小)、4ℓ前後(中)、5ℓ以上(大)の3法量あり、217の小型球形以外は胴長傾向にある。口縁端部は外屈面取り(218・220)、折り返しつまみ上げ(217・221・226・227)、上下端つまみ出し(222)があり、口頸部は細く短くつのが一般的である。胴部下半～底部はヘラケズリするものが多い。216のみ底部糸切り痕を確認した。ほかに口径4～6cmの小型品(223～225)も確認している。横瓶

(256) は胴部叩き成形する俵形器形で、口頸部が太く短く外反するタイプを確認した。

瓶Aと瓶Dの頸部接合法については、大門盤閉塞(A1類)は認められず、小門盤閉塞もしくは絞り切り(A3類)が主体である。瓶A内訳は確認個体数12点中でA2類1点とA3類11点、瓶D内訳は確認個体数12点中でA2類3点、A3類7点、B類2点となった。

〈壺類(228～255)〉 貯蔵具の中で最も高い占有率となる器種である。壺A・壺E・壺Fを確認しており、壺A・壺Fが主体である(概ね3:7の割合だが、小壺口縁が混ざる可能性あり)。壺Aは有蓋で、なで肩胴台付器形である。容量は身では2ℓ～4ℓ前後が主体であるが、蓋口径では10cm～12cm(228～230)、15cm台(231～233)、20cm台(234)の3法量がある。蓋は天井部ヘラケズりするほか、234の大型品は面に対して円弧を描くように叩き成形する。また2次被熱を受けた転用痕が多くみられた。身は口径10cm前後の狭口で、口頸部立ち上がり付近に蓋軸着痕が残る。胴部下半はヘラケズりするが、4ℓ前後のものには叩き成形後ヘラケズりする(235・238)。台部は瓶A同様の形状が主体だが、一部に足高となる新しいタイプも存在する(237)。壺Eは南加賀窯では客体的な肩張り器形である。252と254が肩部張る確実なものだが、253は246・247同様の中小型壺、255はやや肩の張りが弱いもので、厳密には分類できないかもしれない。壺Fは広口なで肩平底器形で、容量8ℓ台(大)と3～4ℓ程(小)の2法量存在する。大法量は長く開く口縁、小法量は短く開く直立気味となる口縁である。共に胴部下半に非回転のヘラケズリを施し、大法量には叩き成形するものも含まれる(245)。251の底面には糊圧痕が観察された。

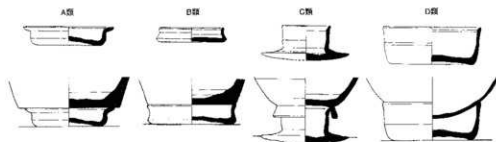
〈甕類(257～266)〉 中甕(30ℓ台)と小甕(30ℓ未満)が主体で、大甕が伴う(頸部片確認、掲載なし)。胴部成形については、外面平行線文叩き出し後カキメ調整、内面同心円文当て具痕が基本だが、中甕の中に叩き出し後内面ハケ調整するものがある(261・265)。叩き工具痕は外面He類、内面Da類が主体である。

3 煮炊具

釜(267～272)、鍋(274)、甌(273)を確認しており、釜主体である。釜は長胴形で、カキメ調整後に非回転ヘラケズりおよび胴部下半～底部の叩き成形を行うものである。叩き工具痕は外面Ha類、内面Da類が主体となる。口縁端部は上につまみ上げるものが主体だが、一部つまみ上げた部分を外へわずかに伸ばす新しいタイプ(271)を含む。鍋も釜同様に口縁端部をつまみ上げるタイプで、胴部はカキメ調整を施す。甌は底部付近のみの資料だが、叩き成形後のカキメ調整が観察される。

4 土師器

底径5.5cmの赤彩土師器壺A(279)を確認した。器面の風化が激しいが、内外ともに赤彩の痕跡が認められる。本窯で焼かれたものではないと推測されるが、他の器種と時期的に齟齬がないため掲載した。ほか271・272・273が土師質の製品である。



第6図 貯蔵具専用焼台の基本類型(小松市教委2002より・S=1/6)

5 窯道具

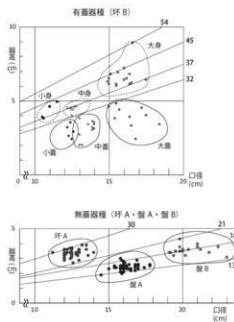
明確な量比は出していないが、前述したように窯体内を中心に須恵器食膳具や貯蔵具の転用焼台(置台)を多数確認している(写真図版12参照)。275は瓶Aの台部片と粘土塊を組み合わせた転用焼台で、体部内傾する専用焼台C類のような断面形状をつくる。一方、専用焼台は灰原周辺の表土でいくつか検出されている。多くは本窯よりも新しい時期に位置づけられる5・6・13号窯由来のものが混入したと考えられるが、その中から本窯に伴うと思われるものを抽出した(276~278)。特に278は能美窯で確認される底部穿孔を施す古いタイプであるが、わずかに1個体にとどまるため、本窯では積極的に専用焼台を使用しなかったことが推測される。

第3節 まとめ

概要の中で漠然と「古い」「新しい」という語句を用いたが、前者を古代Ⅳ期、後者を古代Ⅴ期の要素として考えている。南加賀窯では同時期に、戸津5号窯・58号窯、ニツ梨一貫山9・11号窯灰原および斜面下方堆積灰原の資料があるが、部分的な資料や複数時期混在の資料である。そのため同時期と考えられる能美窯(和気後山谷窯跡群)と対比しながら、操業時期を評価したい。

食膳具は坏盤類主体で、能美窯と比べて坏A・盤A主体は共通するが、坏Bが少なく盤Bが多い。金属器系器種(突帯蓋)の生産や全般的な体部外傾化・薄手化傾向、白色系緊緻製品の定量生産は新しい要素と言えるが、古手の器形や口縁端部折り曲げない坏B小法量、底部ヘラケズリの存続等古い要素も認められる。ヘラケズリは盤Aでほぼなくなり、坏B蓋や盤Bで多い。坏B重ね焼きのⅡa類主体化はⅣ₂期以降の南加賀窯の特徴で、Ⅱb類主体となる能美窯とは逆転傾向にある。能美窯で新たに加わる埴類や足高の盤B等は確認できず、わずかに定着前の埴Bが存在するのみである。高盤は伝統的に太く短い脚部に坏蓋逆転器形の盤部を有する。

第4表 食膳具の法量分布

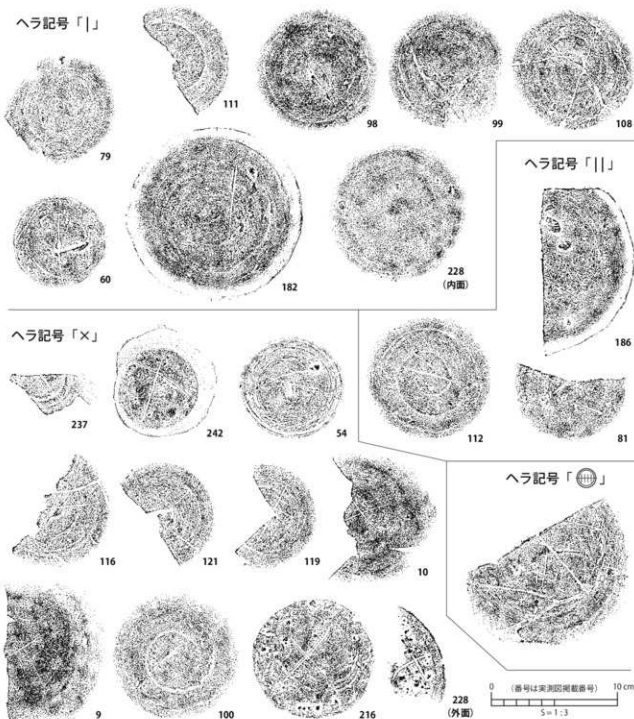


貯蔵具は壺瓶類主体で、Ⅳ₂新期以降に能美窯で進行する現象に共通するが、鉢Bや瓶B等の新器形は確認できない。ただし瓶Dの生産率は高く、Ⅳ期以前の特徴(細く短い口頸部や球形の胴部)を残しつつ、Ⅴ期以降につながる長胴化や法量分化の兆しがみられる。壺類では壺A台部足高タイプは新しい要素であるほか、壺Fが多いのはⅤ期以降に壺Eが増加する能美窯とは異なり、南加賀窯の特徴である。また叩き成形する壺類が存在するが、Ⅴ期以降に中衷の小型化と壺F増加によって小費が減少することに関連するのかもしれない。横根は南加賀窯ではⅣ₂古期以降衰退する器種だが、わずかに残存する。貯蔵具専用焼台は積極的に導入せず、伝統的な転用品を多用する。

能美窯と南加賀窯の生産体制が前者は先進的で後者は保守的と評価される点や、本窯が修復や改造を経ている点を考慮して、本窯操業時期をⅣ₂新期~Ⅴ₁期(8世紀末~9世紀前葉)に位置づけておきたい。またⅤ₁期でも古い段階(上徳山谷山西谷窯段階か?)で操業を終えると推測される。

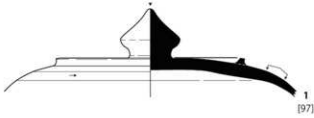
第5表 ヘラ記号構成表

	坏A	坏B蓋	坏B身	盤A	盤B	食膳具 分類不可	壺蓋	壺類	瓶類	貯蔵具 分類不可	計
	44	6	6	45	5	1	1		1	2	111
	6	1		4	2			2			15
	1			2							3
×	24	4	1	17	9		1	3	1		60
不明ヘラ掻き	49	2	4	34	8	2		1		2	102
計	124	13	11	102	24	3	2	6	2	4	291

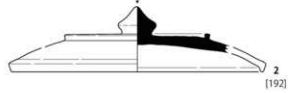


第7図 ヘラ記号拓本

〈灰原出土 突帯蓋〉



〈窯埋土出土 突帯蓋〉



〈4-II号窯1次床出土 坏B蓋〉



〈4-II号窯2次床出土 坏B蓋〉



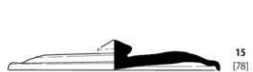
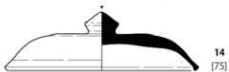
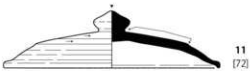
〈窯灰層出土 坏B蓋〉



〈SK01出土 坏B蓋〉



〈灰原・窯埋土出土 坏B蓋〉



第8図 遺物実測図1



18
[180]

19
[181]



20
[182]



21
[183]



22
[184]



23
[186]



24
[79]



25
[80]



26
[71]



27
[74]



28
[89]



29
[90]



30
[92]



31
[87]



32
[178]



33
[69]



34
[177]



35
[176]



36
[185]



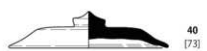
37
[85]



38
[175]



39
[81]



40
[73]



41
[83]



42
[82]



〈舟底状ビット出土 坏 B 身〉



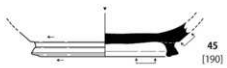
43
[31]

〈SK01 出土 坏 B 身〉

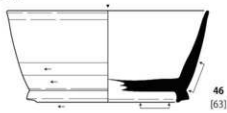


44
[200]

〈灰原・窯埋土出土 坏 B 身〉

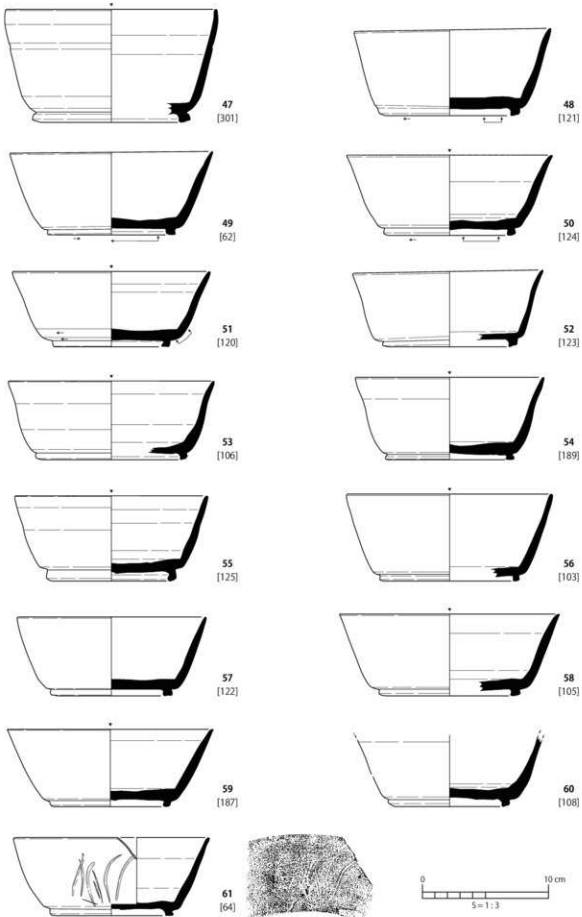


45
[190]

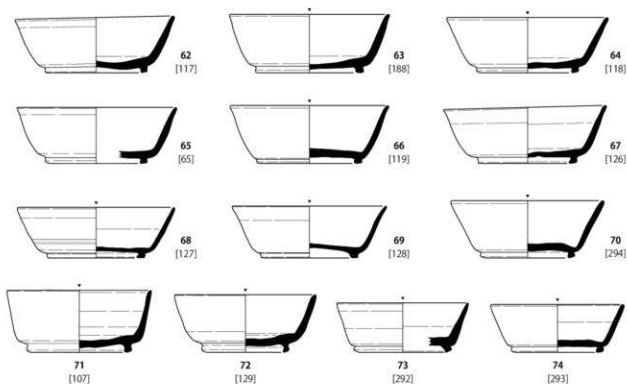


46
[63]

第 9 図 遺物実測図 2



第10図 遺物実測図3



〈4-I号窯2次床出土 坏A〉

〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床下出土 坏A〉



〈4-II号窯1次床出土 坏A〉



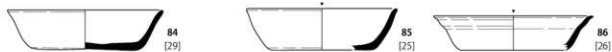
〈4-II号窯1次床下出土 坏A〉

〈4-II号窯2次床出土 坏A〉



〈舟底状ビット出土 坏A〉

〈窯灰層出土 坏A〉

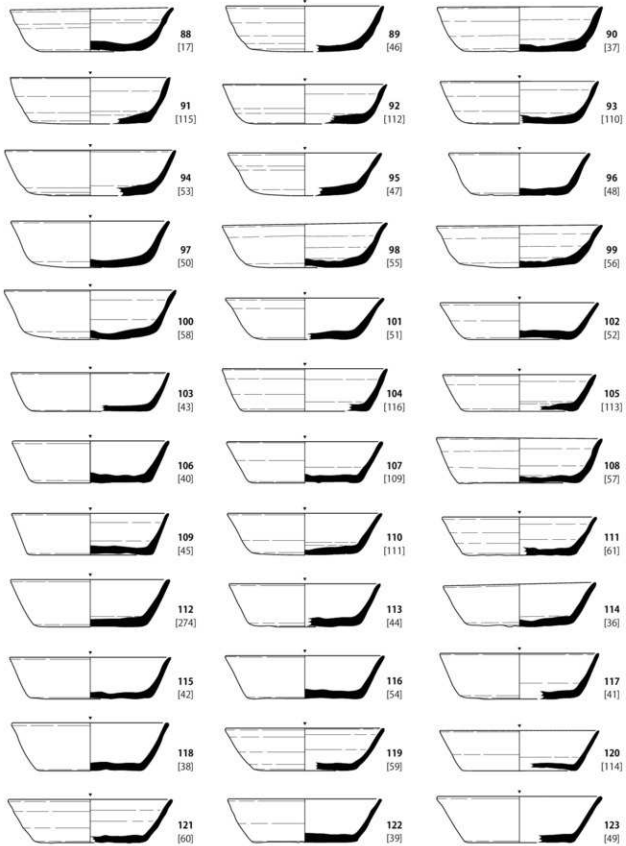


〈SK01出土 坏A〉



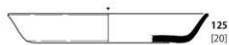
第11図 遺物実測図4

〈灰原・窯埋土出土 坏A〉



第12図 遺物実測図5

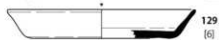
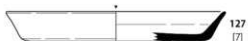
〈4-I号窯2次床下出土 盤A〉



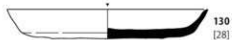
〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床出土 盤A〉



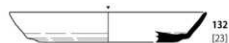
〈4-II号窯1次床(下)出土 盤A〉



〈舟底状ビット出土 盤A〉



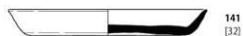
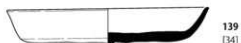
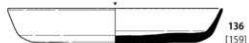
〈窯灰層出土 盤A〉



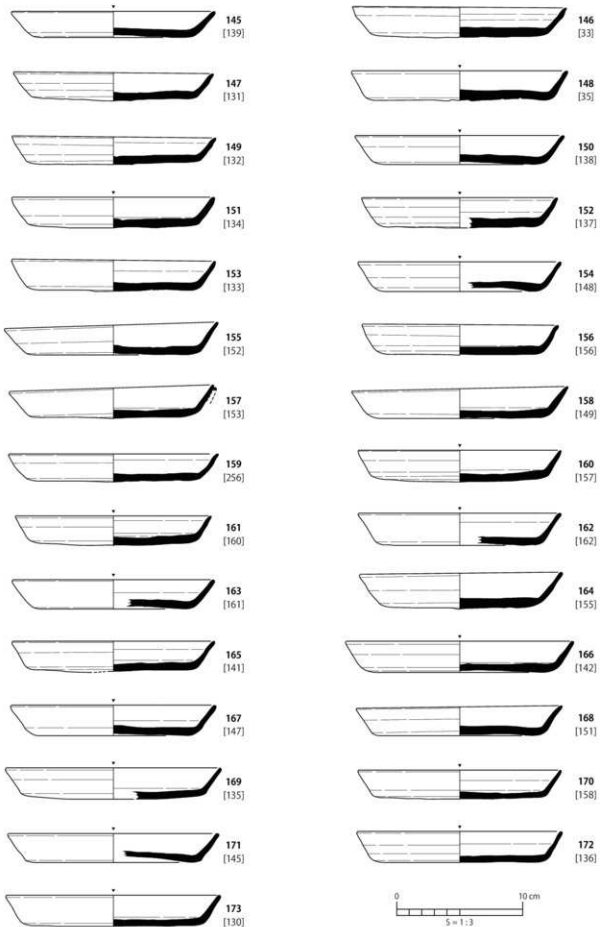
〈SK01出土 盤A〉



〈灰原・窯埋土出土 盤A〉

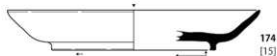


第13図 遺物実測図6

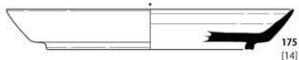


第14図 遺物実測図7

〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床出土 盤B〉



〈4-II号窯1次床出土 盤B〉



〈4-II号窯2次床出土 盤B〉



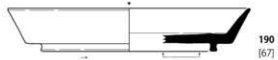
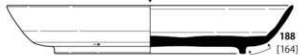
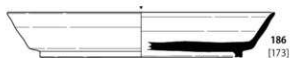
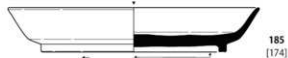
〈舟底状ピット出土 盤B〉



〈SK01出土 盤B〉



〈灰原・窯埋土出土 盤B〉



第15図 遺物実測図8

〈灰原出土 埴B〉



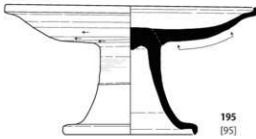
193
[283]

〈舟底状ピット出土 高盤〉



194
[27]

〈灰原出土 高盤〉



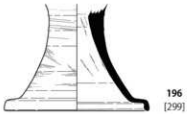
195
[95]



197
[93]



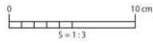
198
[94]



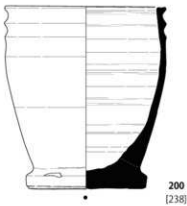
196
[299]



199
[96]



〈灰原出土 鉢F〉



200
[238]



201
[239]



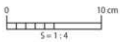
203
[236]



202
[235]



204
[234]



〈灰原出土 鉢A〉



205
[237]

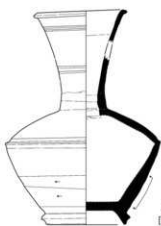
第16図 遺物実測図9

〈SK01 出土 瓶 A〉



206
[253]

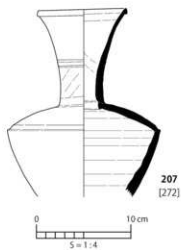
〈灰原・窯埋土出土 瓶 A〉



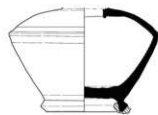
208
[242]



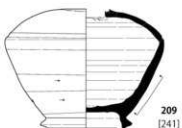
210
[210]



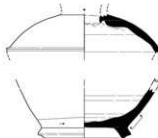
207
[272]



211
[211]



209
[241]



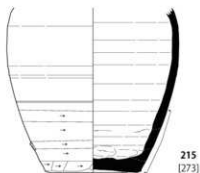
212
[296]

〈4-II号窯 2次床出土 瓶 D〉



214
[278]

〈SK01 出土 瓶 D〉



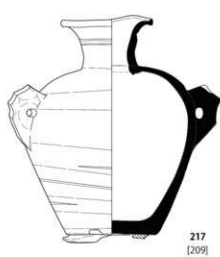
215
[273]

〈灰原+SK07 出土 瓶 D〉

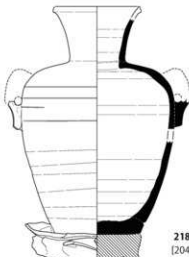


216
[240]

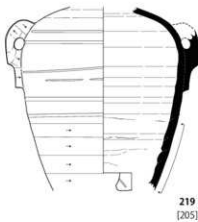
〈灰原・窯埋土出土 瓶 D〉



217
[209]

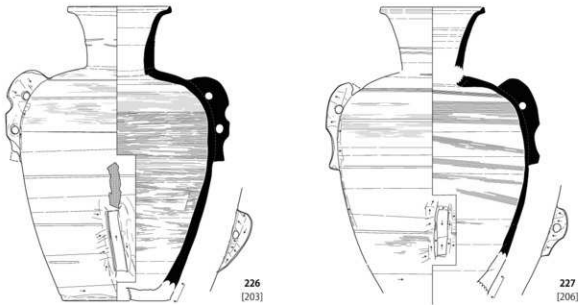
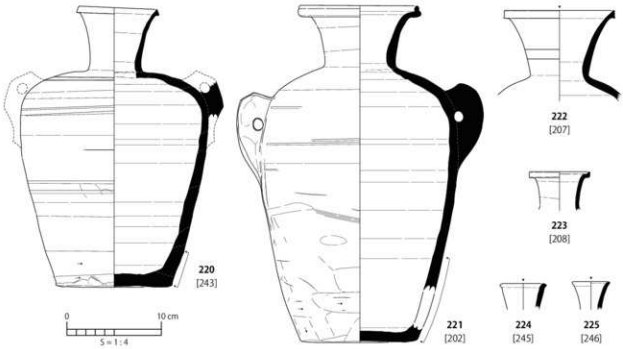


218
[204]



219
[205]

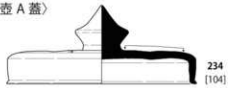
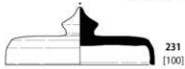
第 17 図 遺物実測図 10



〈SK01+灰原出土 壺A蓋〉

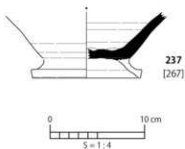
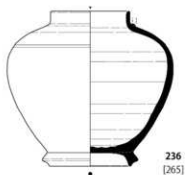
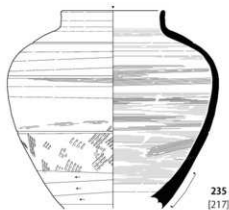


〈灰原出土 壺A蓋〉

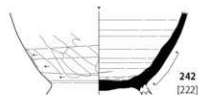
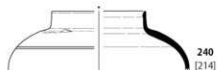
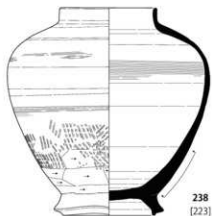


第18図 遺物実測図11

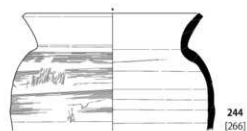
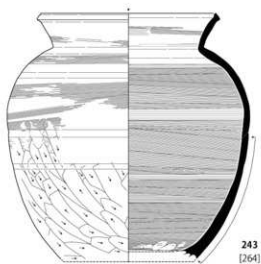
〈窯灰層 + 灰原出土 壺 A〉



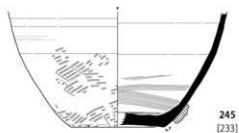
〈灰原・窯埋土出土 壺 A〉



〈窯灰層 + 灰原出土 壺 F〉



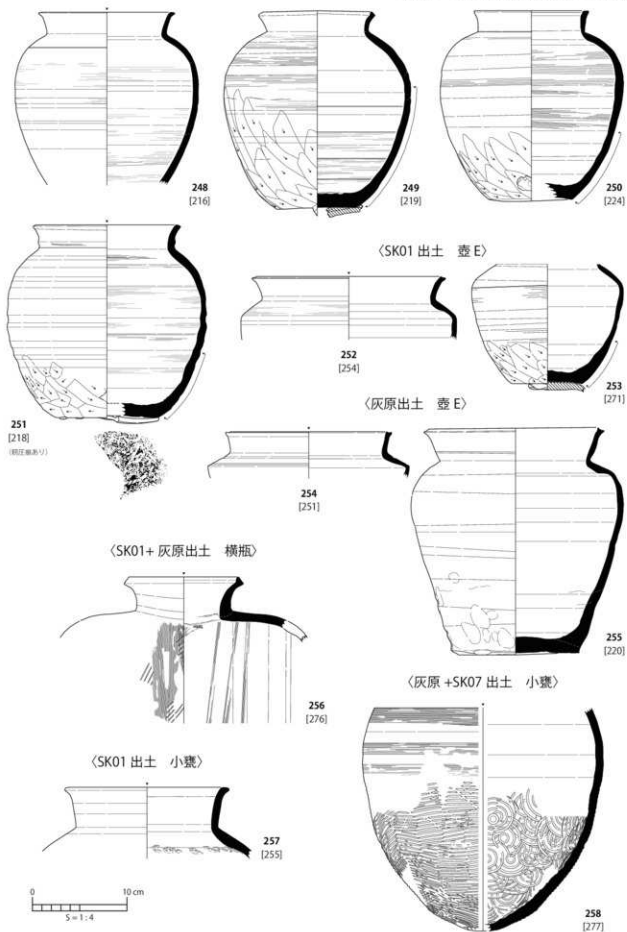
〈SK01+ 窯埋土出土 壺 F〉



〈灰原・窯埋土出土 壺 F〉



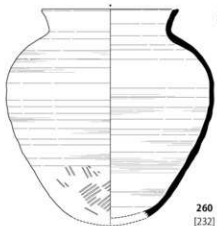
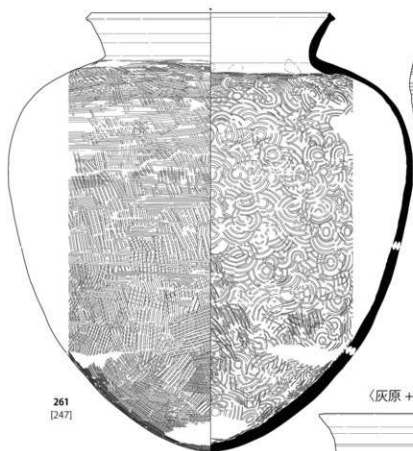
第 19 図 遺物実測図 12



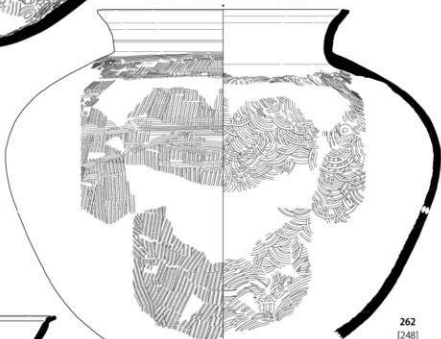
第20図 遺物実測図13

〈SK01+ 灰原 + 窯埋土出土 中甕〉

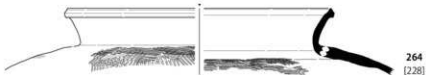
〈灰原出土 小甕〉



〈灰原 + 窯埋土出土 中甕〉

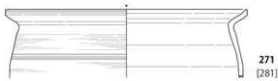
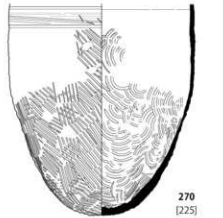
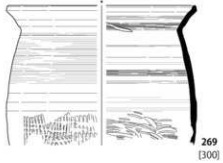
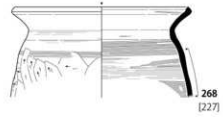
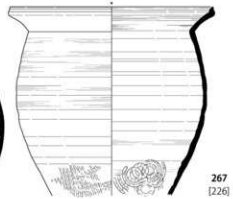


〈灰原出土 中甕〉

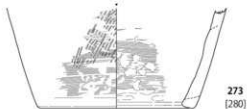


第 21 図 遺物実測図 14

〈灰原出土 長胴釜〉



〈灰原出土 甌〉



〈灰原出土 鍋〉



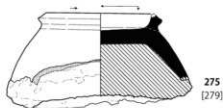
265
[249]

266
[252]

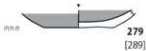


第22図 遺物実測図15

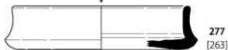
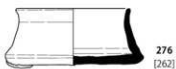
〈舟底状ピット出土 瓶A 転用焼台〉



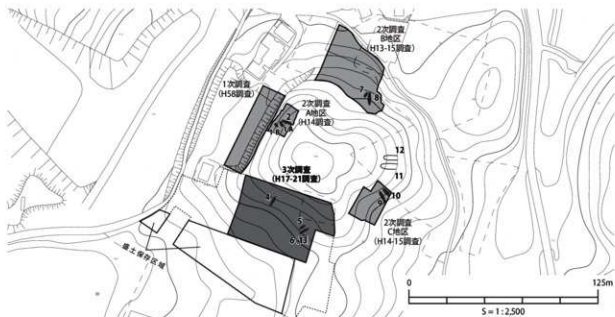
〈灰原出土 赤彩土師器塊 A〉



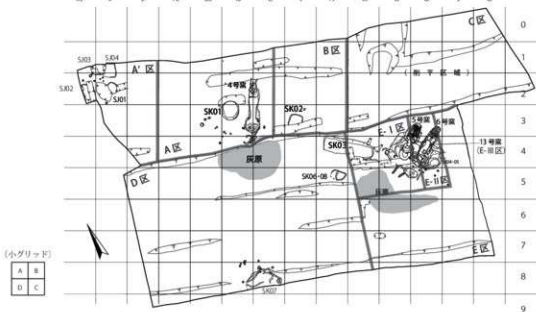
〈灰原出土 専用焼台〉



第 23 図 遺物実測図 16



あ い う え お が き く け こ さ し す せ



第 24 図 調査位置図 (上段・S=1:2500) と全体平面概略図 (下段・S=1:600)

発掘No.	実測No.	窯種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	作機	焼成	色調	胎土	完備	回転	特記(並ね焼成・焼面等)
1	97	突帯蓋	D	灰原	き4Dgr22層	つ[47], 高65, つ高39	製	型織	内明青灰, 外釉(灰付-7.5Y4/2)	通常	-	右	大外回転??
2	192	突帯蓋	A	窯理土	4R7区9-10層・B区2層・盛土2区	口[19]高, つ3, 高[52], つ高2.3	製	型織	内灰、外釉=灰付-7.5Y4/2	砂多	1	右	大外回転??
3	11	坯蓋大	A	B1窯床	4R72次焼41	口[17], 高(2)	転	(2次焼熟)	内内暗灰	通常	5	右	重II類?、大外回転??
4	12	坯蓋中	A	B2窯床	4R721	口[15]2, 高(6)	転	(2次焼熟)	内内暗灰	砂多	2	右	大外回転??. 砂が多
5	21	坯蓋小	A	窯灰層	4R7C区3層・5層	口[12]2, 高(2)	製	今中不具(平蓋)	内暗(7.5Y7/70), 外灰	通常	14	-	重I類?
6	22	坯蓋大	A-D	窯灰層・灰原	4R7D区3.5層+き4Dgr16層(97?) + き4gr	口[16.4, つ2.7, 高3.9, つ高1.5	製	良	内内灰白	通常	20	-	重II類
7	260	坯蓋大	A	SK01	SK1.19-163-91	口[16.4, 高(2)	転	(2次焼熟)	内外青(内2)	砂多	11	-	一部静な状態
8	91	坯蓋大	A-D	灰原	か4Rgr7' 13層・7E' 14層・か4Cgr18層-調D区灰原内	口[115], つ2.1, 高4.4, つ高1.7	転	(2次焼熟)	内外暗青(内2)	砂多	7	-	重I類?
9	77	坯蓋大	A	灰原	き4Rgr1層・6層	口[115.4], つ[2.5], 高3.8, つ高1.4	製	型織	内内灰白	通常	22	右	重II類, 大外回転??. 大内9号? [1]
10	84	坯蓋大	A-D	灰原	か4Agr1層・き4Rgr24層・き4Agr盛土・か4Dgr盛土・か4Cgr7'積香	口[16.3], つ[2.7], 高3.3, つ高1.1	製	型織	内外灰白	通常	9	右	重I類, 大外回転??. 大内9号? [1]
11	72	坯蓋大	A-D	灰原	き4Rgr22層・き4Dgr21層・き4Dgr19層・き4gr内	口[17.2], つ[2.5], 高4.5, つ高1.8	製	型織	内外灰白	通常	5	右	重I類?
12	70	坯蓋大	D	灰原	き4Agr22層・き4Rgr18-27層・き4Dgr21層	口[17.5, つ2.7, 高4, つ高1.6	製	良好	内灰白, 外灰	通常	32	右	重I類?, 大外回転??
13	76	坯蓋大	A	灰原	き4Rgr1層・14層・き3Cgr1層・1-97?	口[18.4], つ[2.5], 高3.4, つ高1.1	製	良好	内外灰白	通常	3	-	重II類
14	75	坯蓋大	D	灰原	か4Cgr26層・き4Agr26層	口[15], つ[2.6], 高4.6, つ高1.2	製	型織	内外灰白	通常	3	-	重II類
15	78	坯蓋大	D	灰原	き4Dgr22層・き4gr内	口[16.8, つ[2.7], 高2.4, つ高1.2	製	型織	内灰白, 外灰	通常	26	-	重I類
16	88	坯蓋大	D	(灰原)	か4Dgr灰原盛土・か4gr内	口[15.5], つ[2.4], 高4.8, つ高1.2	製	良好	内外灰	通常	8	右	重II類, 大外回転??
17	179	坯蓋大	A-D	灰原(+窯理土)	4R7区1区・盛土1区・か4Agr1層・か4Rgr・か4Cgr18層	口[15.9], 高(2.3)	製	良好	内外灰	通常	11	右	重II類?, 大外回転??
18	180	坯蓋大	A	灰原(+窯理土)	4R7盛土1区・か4Rgr	口[15.8], 高(2.4)	製	良好	内外灰	通常	15	-	重II類?, 大外回転??
19	181	坯蓋大	A	灰原(+窯理土)	4R7盛土1区・か4Agr1層	口[17.2], 高(2)	製	型織	内灰白, 外灰	通常	8	右	重I類
20	182	坯蓋大	A	(窯理土)	4R7盛土1区	口[16.5], 高(2.9)	製	今中不具(平蓋)	内外白~灰白	通常	10	-	重II類?, 大外回転??
21	183	坯蓋大	A-D	灰原(+窯理土)	4R7盛土1区・か4Rgr18-27層・か4Dgr18層	口[16.1], 高(2.5)	製	良好	内外灰	通常	10	左	重II類, 大外回転??
22	184	坯蓋大	A-D	灰原・窯理土	4R7D区2層・理土1区・き4Rgr22-22層	口[17], 高(2.5)	製	型織	内灰白, 外灰	通常	20	-	重I類, 大外回転??
23	186	坯蓋大	A-D	灰原・窯理土	4R7D区2層・調D区灰原・調D区土1(灰原区)	口[16.4], 高(2.5)	製	良好	内灰、外青灰	砂多	11	左	重II類, 大外回転??
24	79	坯蓋中	A-D	灰原	き3Cgr16層・調D区灰原内	口[13.2], つ[2.5], 高2, つ高0.9	製	型織	内灰白, 外釉(4R7-黒7.5Y3/1)	砂少	23	-	重I類
25	80	坯蓋中	D	灰原	き4Dgr19層・き5Dgr盛土・21層	口[13], つ[2.6], 高2, つ高0.9	製	型織	内外灰白	砂少	13	-	重I類
26	71	坯蓋中	A-D	灰原	か4Agr1層・か4Cgr21層・き4Rgr24層-調D区内	口[13], つ[2.1], 高2.7, つ高0.9	製	良	内外灰白	通常	5	-	重I類
27	74	坯蓋中	D	灰原	き4Agr25層	口[13.6, つ2.2, 高3.4, つ高1.2	製	型織	内外灰白	通常	33	-	重II類
28	89	坯蓋中	D	灰原	き4Agr22層・き4Dgr22層	口[14], つ[3.2], 高3.4, つ高1.3	製	良	内灰、外灰白	通常	11	-	大外回転??
29	90	坯蓋中	A	灰原	か4Rgr7' 13層	口[13.5], つ[2.6], 高3.4, つ高1.3	転	(2次焼熟)	内外灰白	通常	6	-	重I類?
30	92	坯蓋中	A	灰原	き3Dgr2層・6層	口[13.9], つ[2.5], 高3.2, つ高1.3	製	良好	内外灰	通常	19	-	重I類?, 大外回転??
31	87	坯蓋中	D	(灰原)	か4Dgr灰原盛土	口[14], つ[2.7], 高3.1, つ高1.3	製	良好	内外灰白	砂多	13	-	重I類
32	178	坯蓋中	A	窯理土	4R7A区2.3層・H区10層・H区13層・盛土2区	口[13], つ[2.7], 高3.8, つ高1.2	製	型織	内外灰白	通常	14	右	重I類, 大外回転??
33	69	坯蓋中	A-D	灰原	き4Agr1.3層・22層・き4Dgr積香	口[14], つ2.7, 高3.5, つ高1.2	製	良好	内灰白, 外灰	通常	31	-	重I類?
34	177	坯蓋中	A	灰原(+窯理土)	4R7盛土1区・き4Agr6層	口[13.9], つ[2.6], 高3.6, つ高1.5	転	(2次焼熟)	内外灰白	通常	9	-	重II類, 大外回転??
35	176	坯蓋中	A	(窯理土)	4R7盛土1区	口[13.9, つ[2.9], 高3, つ高1.2	製	良好	内灰白, 外灰~青灰	通常	20	-	大外回転??
36	185	坯蓋中	A-D	灰原(+窯理土)	4R7盛土・か4Cgr18層	口[13.6], 高(2.4)	製	良好	内外灰	通常	17	-	重II類?, 大外回転??
37	85	坯蓋小	A-D	(灰原)	き5Agr7??. 調A区盛土1・1-97?	口[12.5, つ2.7, 高2.4, つ高0.9	製	良好	内灰白, 外灰	通常	24	右	重I類, 大外回転??. 大内9号? [1]
38	175	坯蓋小	A	(窯理土)	4R7盛土1区・土1	口[12.3], つ[2.5], 高2.6, つ高0.8	製	良好	内外灰, 外灰	砂多	11	-	重I類, 大外回転??
39	81	坯蓋小	D	灰原	き4Cgr22層	口[12.2, つ2.4, 高3.2, つ高1.2	製	良好	内外灰白	通常	30	-	重I類
40	73	坯蓋小	A-D	灰原	か4Agr13層・き4Agr18層・か5gr内	口[12.6, つ2.5, 高2.9, つ高1.2	製	良好	内外灰、外青灰	通常	20	-	重II類
41	83	坯蓋小	D	灰原	き4Agr25層	口[12.4, つ2.6, 高3.1, つ高(1)	転	(2次焼熟)	内外灰	通常	10	-	重II類
42	82	坯蓋小	D	灰原	き4Agr25層	口[12.4, つ[2.4], 高3.5, つ高1.2	製	良好	内外青灰	通常	10	-	重II類
43	31	坯蓋中	A	青底状+?	青底1層24	口[12.2], 台[7]有, 高4, 内高0.5	転	(2次焼熟)	内内暗青灰	通常	15	-	初付有蓋
44	200	坯蓋中	A	SK01	SK1.53	口[13], 高(2.8)	製	良好	内外灰	通常	6	-	重I類
45	190	坯蓋中	D	(灰原)	き5Agr4??.	台[10], 高(2.5), 台高1.1	製	良好	内外灰	通常	7	-	底外回転??
46	63	坯蓋大	D	(灰原)	調D区灰原内	口[16], 台[2]有, 高7.2, 台高0.9	製	型織	内外灰白	通常	8	-	体下一底外回転??
47	301	坯蓋大	A	灰原	き4Rgr6層・き3Cgr1-14層	口[11]有, 台[12.5], 高8.9, 台高0.8	製	型織	内灰、外青灰	砂多	15	-	外1枚焼?
48	121	坯蓋大	D	灰原	か4Cgr18-27層・97?	口[15.6, 台[11], 高6.9, 台高0.6	製	良好	内灰、外青灰~灰	砂多	15	-	底外回転??

掲載No.	実測No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性状	焼成	色調	胎土	指存	副載	特記 (重丸焼き・焼痕等)
49	62	坏身大	D	灰原	※4Agr18層	口16.2, 台10, 高6.5, 台高0.4	製	良好	内灰白, 外青灰	通常	25	右	底跡同記号「」
50	124	坏身大	D	(灰原)	※4Cgr灰原内	口116], 台110], 高6.4, 台高0.6	製	良好	内灰, 外青灰	通常	7	-	底跡同記号「」
51	120	坏身大	D	灰原	※4Cgr21層・21・26層・18・27層	口115.5], 台10.1], 高6.6, 台高0.5	製	良好	内灰, 外青灰~内灰	通常	7	右?	底跡同記号「」
52	123	坏身大	D	灰原	※4Dgr18層・21層・22・22層	口15], 台10.5, 高6.1, 台高0.6	製	良好	内灰白	通常	20	-	
53	106	坏身大	A	灰原+窯埋土	4#N1区9層-※4Agr3層	口16.5], 台11.1], 高6.2, 台高0.5	製	良	内灰白, 外青灰	通常	4	-	
54	189	坏身大	D	灰原	※4Dgr19層	口115], 台110.2], 高6.5, 台高0.5	製	不良(生)	内灰白	通常	4	右	底跡同記号「」
55	125	坏身大	D	灰原	※4Dgr22・22層-※5Bgr窯土	口115.1], 台110.2], 高6.8, 台高0.9	製	良好	内灰白	通常	17	右	
56	103	坏身大	D	灰原	※4Cgr19層-※4Dgr窯土	口116.4], 台112], 高6.8, 台高0.4	製	弊織	内灰白, 外灰	通常	20	-	
57	122	坏身大	D	灰原	※4Cgr20・21層・21層-※4Dgr18層-21層-22・22層	口114.9, 台9.4, 高6.3, 台高0.5	製	良好	内灰白, 外青灰	砂多	15	右?	
58	105	坏身大	A・D	灰原(+窯埋土)	4#F表土1区・窯土1区-※4Cgr18・21層	口117.5], 台112], 高6.4, 台高0.5	製	良好	内外灰	通常	11	-	
59	187	坏身大	A	灰原	※3Cgr16層-表土1・窯土1	口116.4], 台10.5], 高6.1, 台高0.5	製	良好	内外灰	通常	5	-	
60	108	坏身大	A	窯埋土	4#F E区・M区	台9.6, 高6.6, 台高0.5	製	良	内外灰白	砂多	36	右	底跡同記号「」
61	64	坏身大	A	灰原	※4Bgr6層-※3Cgr6層-※3Dgr6層	口115.5], 台9.5, 高6.1, 台高0.6	製	弊織	内外青灰	砂多	26	右?	体跡同記号「」
62	117	坏身中	D	灰原	※4Dgr21層-22・22層-24層	口12.4, 台7.8, 高4.5, 台高0.5	製	良好	内灰, 外青灰	通常	36	右	
63	188	坏身中	A	灰原	※3Cgr1層・6層-※4Bgr6層-表土1・窯土1	口112.7], 台8.4], 高4.6, 台高0.5	製	不良	内灰白~内灰, 外青灰~内灰	通常	18	右	
64	111	坏身中	D	灰原	※4Cgr21層-※4Dgr22・22層	口112.5], 台11], 高4.4, 台高0.4	製	良	内外灰	通常	15	右	
65	65	坏身中	D	(灰原)	※5Agr土比砂	口12.6, 台7.9, 高4.4, 台高0.4	製	良	内灰, 外青灰	通常	28	右	
66	119	坏身中	A	灰原	※4Agr1層-※4Bgr14層-※3Cgr6層・1・14層	口112.5], 台10.2], 高4.5, 台高0.5	製	弊織	内灰白, 外陶灰	通常	13	右?	
67	126	坏身中	D	灰原	※4Agr6層・13層-※4Bgr6層-※4Dgr19層	口112.8, 台7.8, 高4.6, 台高0.5	製	弊織	内灰, 外青灰	通常	21	-	
68	127	坏身中	D	灰原	※5Agr6層-表土-※4Cgr	口112.5], 台17.6], 高4.4, 台高0.4	製	不良	内灰, 外灰白	通常	5	-	外2条沈黙?
69	128	坏身中	D	灰原	※4Dgr19層-※5Agr5層・7・8層	口112.1], 台17.4], 高4.2, 台高0.4	製	弊織	内灰白, 外灰	砂少	8	右	
70	294	坏身中	D	灰原	※4Bgr24層-※4Cgr灰原内	口112.2], 台17.5], 高4.5, 台高0.4	製	弊織	内灰白, 外灰	通常	2	右	
71	107	坏身小	A	(窯埋土)	4#F窯土1区	口111.5], 台18.4], 高4.9, 台高0.6	胎	(2次焼熟)	内外陶灰	通常	4	-	
72	129	坏身小	A・D	灰原(+窯埋土)	4#F表土1区-※4Cgr18層-※4Agr18層-22・22層	口111], 台17], 高4.6, 台高0.6	胎	(2次焼熟)	内灰白, 外青灰	通常	26	-	
73	292	坏身小	D	灰原	※4Bgr23層	口110.5], 台17.1], 高3.9, 台高0.5	製	良好	内灰, 外青灰	通常	8	-	
74	293	坏身小	A	灰原	※4Agr1層-※4Agr1-3層-表土1	口116.6], 台17.3], 高3.8, 台高0.5	製	弊織	内外灰白	通常	10	右?	
75	16	坏身A	A	Ⅱ1窯床	4#F1次窯2次床1・8・10	口114], 底110.2], 高3.4	製	弊織	内外灰白	砂少	15	右	重丸製
76	18	坏身A	A	Ⅱ1窯床下・Ⅱ2窯床	4#F1次窯2次床3・7・8・2次窯1次床床下0区	口113.2], 底110], 高3.9	製	不良(生)	内外陶灰 (5YR5/6), 外青灰 (10YR5/6)	通常	8	右	重丸製
77	19	坏身A	A	Ⅱ1窯床下・Ⅱ2窯床	4#F1次窯2次床4・6・8・2次窯2次床床下0区	口112.4], 底10.4], 高3.7	製	不良(生)	内外陶灰 (5YR5/6)	通常	4	右	重丸製
78	3	坏身A	A	Ⅱ1窯床	4#F2次床13・5	口113], 底10.2], 高2.9	製	良好	内外灰	通常	8	右	重丸製
79	5	坏身A	A	Ⅱ1窯床	4#F2次床32	口112], 底10.7], 高3.1	胎	(2次焼熟)	内外陶灰	通常	13	右	底跡同記号「」
80	4	坏身A	A	Ⅱ1窯床	4#F2次床16	口112], 底10.7], 高2.9	胎	(2次焼熟)	内外陶灰	通常	7	右?	
81	297	坏身A	A	Ⅱ1窯床下	4#F2次床1次床内(床下L区)	底8.6, 高12.9	製	良好	内外灰	通常	36	右	底跡同記号「」
82	1	坏身A	A	Ⅱ2窯床	4#F7	口113], 底10], 高3.5	胎	(2次焼熟)	内外, 外陶灰	通常	7	-	
83	2	坏身A	A	Ⅱ2窯床	4#F37	口113.6, 底9.6, 高3.2	製	弊織	内灰白, 外灰	通常	31	右	
84	29	坏身A	A	筒底坑(+)	筒底上層49+筒底床下G区(+)	口12.4, 底8.8, 高3	胎	(2次焼熟)	内外灰, 外陶灰	通常	24	右	重丸製
85	25	坏身A	A	窯灰原	4#F A区3層	口112], 底10.6], 高3.2	製	不良(生)	内外灰	通常	5	-	
86	26	坏身A	A	窯灰原	4#F C区3層	口112.6], 底10.2], 高2.7	製	弊織	内外灰	通常	8	-	重丸製
87	199	坏身A	A	SK01	SK1 C区2層	口112.5], 底11.0], 高3.3	製	不良(生)	内外白	通常	3	-	
88	17	坏身A	D	灰原	※4Agr24層	口12.8, 底8.6, 高3.4	製	良好	内外灰	通常	26	右	重丸製
89	46	坏身A	D	灰原	※4Agr22層	口112.5], 底10.6], 高3.6	製	不良(生)	内外白	通常	11	-	重丸製
90	37	坏身A	D	灰原	※4Cgr18層	口13], 底9.8, 高3.5	製	良	内外灰	通常	25	右	重丸製
91	115	坏身A	A	(窯埋土)	4#F表土1区	口112.5], 底10.9], 高3.7	製	不良(生)	内外灰	砂多	8	-	重丸製
92	112	坏身A	A	(窯埋土)	4#F窯土1区	口112.9], 底10.3], 高3.2	製	良好	内外灰	砂少	9	-	重丸製
93	110	坏身A	A・D	灰原(+窯埋土)	4#F表土1区-※4Cgr表土・窯土・灰原内	口112.4], 底10.8], 高3.4	製	良好	内外灰	通常	5	-	重丸製
94	53	坏身A	D	灰原	※4Agr1層	口113.5], 底10.9], 高3.6	製	良	内外陶灰	通常	10	-	
95	47	坏身A	D	灰原	※4Agr18層-22・22層	口112.2], 底10.6], 高3.4	製	良好	内外灰	通常	19	右?	
96	48	坏身A	D	灰原	※4Agr22層-24層・25層	口111.2], 底17.1], 高3.4	製	良好	内外灰	通常	12	右	
97	50	坏身A	D	灰原	※4Agr22層-22・22層-24層-※4Cgr24層	口112.5], 底10.2], 高3.7	製	良好	内外灰	通常	8	右	重丸製
98	55	坏身A	D	灰原	※4Dgr18層	口13], 底9.4, 高3.4	製	不良(生)	内外灰白	砂多	10	右	重丸製, 底跡同記号「」
99	56	坏身A	D	灰原	※4Dgr21層	口13], 底9.5, 高3.4	製	不良(生)	内外灰白	砂多	14	右	重丸製, 底跡同記号「」
100	58	坏身A	D	灰原	※4Agr22層	口113.5], 底110.4], 高3.9	製	不良(生)	内外白	通常	10	右	重丸製, 底跡同記号「」
101	51	坏身A	D	灰原	※4Agr22層-22・22層-25層	口112.5], 底10.2], 高3.3	製	良好	内外灰	通常	9	-	重丸製

編號No.	発掘No.	器物名	区	地点	取上り層様	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	出坑	方位	特記(産む焼き・焼痕等)
102	52	坏A	D	灰原	き4Ag22層	口112.5, 底109, 高3.3	製	良好	内青灰、青灰	通常	11	右?	
103	43	坏A	D	灰原	き4Dg22層・22層	口112.5, 底104, 高3.1	製	良好	内青灰	通常	10	右	
104	116	坏A	A	栗理土	4F7層	口113, 底110.2, 高3.4	製	良好	内外灰白	通常	9	-	産物類
105	113	坏A	D	灰原	き4Ag18層・表土	口112, 底109, 高2.9	製	製織	内外灰白	通常	18	-	産物類
106	40	坏A	D	灰原	き4Ag22層・25層	口112.5, 底109, 高3.3	製	製織	内外青灰	通常	7	右	産物類
107	109	坏A	D	灰原	き4Bp18層・22層	口112.1, 底109, 高3.3	製	不良(牛)	内外白	通常	31	左?	
108	57	坏A	D	灰原	き4Dg18層・22層	口113, 底9.6, 高3.6	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	24	右	産物類, 底外5記号「1」
109	45	坏A	D	灰原	き4Dg6層・か4Cgr	口112.5, 底110, 高3.3	製	製織	内外灰	通常	7	右	産物類
110	111	坏A	A	(栗理土)	4F7表土1区	口112, 底108, 高3.3	製	良好	内外灰	通常	13	-	産物類
111	61	坏A	D	灰原	か4Cg21層・き5Aγ・13γ	口112, 底101, 高3	製	今今不良(牛半)	内外灰、青灰	通常	13	右	底外5記号「1」
112	274	坏A	D	灰原	き4Ag22層	口112.5, 底109, 高3.7	製	不良(牛)	内外白	通常	7	右	産物類, 底外5記号「1」
113	44	坏A	A・D	灰原	き4Ag1層・3層・き4Bp24層	口112, 底108, 高3.4	製	良好	内外灰	通常	12	-	産物類
114	36	坏A	D	灰原	き4Dg22層	口112, 底8.6, 高3.3	製	良好	内外灰	通常	32	右	産物類
115	42	坏A	D	灰原	き4Ag22層・25層	口112.8, 底104, 高3.3	製	製織	内外青灰	通常	5	右	産物類
116	54	坏A	D	灰原	き4Bp18層・21層・22層	口112.5, 底101, 高3.4	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	19	-	産物類, 底外5記号「×」
117	41	坏A	D	灰原	き4Dg6層	口112.5, 底104, 高3.6	製	良好	内外灰	砂多	10	-	
118	38	坏A	D	灰原	き4Dg18層	口112, 底8.3, 高3.6	製	良	内外灰	砂多	27	-	産物類
119	59	坏A	A・D	灰原	き3Dg6層・き4Bp22層・24層・表土1	口112.5, 底109, 高3.4	製	製織	内外灰	通常	11	右?	産物類, 底外5記号「×」
120	114	坏A	A	栗理土	4F7土区	口112.5, 底109, 高3.2	製	良好	内外灰	砂少	7	-	産物類
121	60	坏A	A・D	灰原	か4Ag1層・き4Bp22層・24層	口113, 底108, 高3.4	製	製織	内外青灰	通常	10	-	産物類, 底外5記号「×」
122	39	坏A	D	灰原	き4Dg6層・き4gr灰原内	口112.2, 底8.2, 高3.6	製	不良(麩)	内外明青灰・5YR7/2	通常	26	右	産物類
123	49	坏A	D	灰原	き4Dg18層・7F糖査	口113, 底108, 高3.6	製	良	内外灰	砂少	10	-	産物類
124	10	製A	A	1・2区床下	4F71区床下D区	口110, 底113, 高2.5	製	良好	内外、外灰白	通常	18	右	産物類
125	20	製A	A	1・2区床下	4F71区床下D区	口110, 底113, 高2.3	製	製織	内外灰	通常	5	-	産物類
126	9	製A	A	1・2区床下+1区床下	4F72区床下21-4F733	口116.5, 底113.4, 高2.3	製	製織	内外灰	通常	13	右	産物類
127	7	製A	A	1・2区床下+床下	4F72区床下30-2区床下N区	口117.4, 底115, 高2.4	製	良好	内外明青灰	砂多	9	右	
128	8	製A	A	1・2区床下+床下	4F72区床下35-2区床下N区	口116.4, 底113.5, 高2.6	製	不良(牛)	内外白	通常	3	右?	
129	6	製A	A	1・2区床下	4F722	口115, 底111, 高2.3	製	2区(表裏)	内外灰	通常	3	-	
130	28	製A	A	母底状+母底1層64	4F71区床下6	口110, 底113.0, 高2.3	製	2区(表裏)	内外、外明青灰	通常	6	-	
131	24	製A	A	製灰層	4F7D区5層	口117.8, 底113.2, 高2.6	製	製織	内外灰	通常	5	-	産物類
132	23	製A	A	製灰層	4F7D区5層	口115.8, 底112.8, 高2.4	製	製織	内外、外青灰	通常	3	-	産物類
133	257	製A	A	SK01	SK1-104	口116, 底13.7, 高2.8	製	良好	内外灰	砂多	26	右	
134	258	製A	A	SK01	SK1-105	口117, 底13.8, 高2.6	製	良好	内外灰	通常	26	右	産物類
135	143	製A	D	灰原	き4Ag24層・き4Cgr24層	口117, 底114.8, 高2.6	製	良	内外灰	通常	10	右	
136	159	製A	D	灰原	き4Ag24層・24層	口116.9, 底115.2, 高2.9	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	6	-	
137	146	製A	D	灰原	き4Cgr26層	口116, 底113.0, 高2.6	製	良好	内外、外明灰	通常	19	-	
138	150	製A	D	(灰原)	き4gr灰原内	口115.9, 底131, 高2.9	製	良好	内外灰	通常	23	右	産物類
139	34	製A	D	灰原	き4Bp1層・23層・24層+か4Cgr表土	口116, 底113.3, 高2.8	製	良好	内外灰	通常	15	右	
140	154	製A	A	灰原	き3Dg2層・6層・き4Bp6層	口116.2, 底13.8, 高2.3	製	良	内外灰	通常	24	右	産物類
141	32	製A	D	灰原	き4Dg21層	口115.8, 底13.4, 高2.1	製	製織	内外灰	通常	31	右	産物類
142	144	製A	D	灰原	き4Dg24層	口115.9, 底113.7, 高2	製	良	内外灰白	通常	16	-	産物類
143	140	製A	D	灰原	き4Dg6層	口116, 底113.9, 高2.1	製	2区(表裏)	内外灰	砂多	12	右?	
144	163	製A	A	(栗理土)	4F7表土1区	口116.8, 底114.3, 高2.2	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	5	-	産物類
145	139	製A	D	灰原	か4Cgr23層	口116, 底113.4, 高2.1	製	製織	内外明青灰	通常	8	-	産物類
146	33	製A	D	灰原	き4Dg2層・18層・21層	口116.8, 底14, 高2.4	製	今今不良(牛半)	内外白	通常	14	右	産物類
147	131	製A	D	灰原	き4Ag22層・き4Dg21層	口115.8, 底13.2, 高2.3	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	28	左?	産物類
148	35	製A	D	灰原	き4Dg22層・き4Dg25層+表土D区灰原内	口117, 底115, 高2.3	製	良好	内外灰、青灰	通常	7	-	産物類
149	132	製A	A	灰原	き4Bp6層	口116, 底13.7, 高2.3	製	今今不良(牛半)	内外灰白	通常	24	右	産物類
150	138	製A	D	灰原	き4Ag26層	口116.4, 底113.6, 高2.3	製	良好	内外灰	通常	16	-	産物類
151	134	製A	D	灰原	か4Cgr18層	口116, 底113.6, 高2.5	製	良	内外、青灰	通常	17	右	産物類
152	157	製A	D	灰原	か4Ag6層	口115.5, 底112.2, 高2.2	製	不良(牛)	内外白	通常	12	-	産物類
153	133	製A	A	灰原	き3Cgr1層・き4Bp14層・盛土	口116, 底13.7, 高2.6	製	良	内外灰、青灰	砂少	18	-	産物類
154	148	製A	D	灰原	き4Dg6層・24層・7F糖査	口116, 底113.6, 高2.4	製	製織	内外灰	通常	10	-	産物類
155	152	製A	D	(灰原)	き4Dgr盛土	口116.8, 底13.7, 高2.6	製	不良(麩)	内外明青灰・5YR7/2～6/2	通常	16	右	産物類
156	156	製A	D	灰原	き4Dg21層	口115.4, 底13.2, 高2.5	製	不良(牛)	内外灰	通常	26	-	産物類
157	153	製A	D	灰原	き4Bp22層	口116.4, 底13.4, 高2.7	製	良好	内外灰	通常	27	右	産物類
158	149	製A	D	(灰原)	き4gr灰原内	口117, 底14.4, 高2.6	製	製織	内外灰白	通常	29	右	産物類
159	256	製A	A	灰原	き4Ag6層	口116.5, 底113.8, 高2.2	製	不良(牛)	内外白	通常	7	-	産物類, 底外5記号「1」
160	157	製A	A	灰原	き4Ag2-3層・6層	口115.9, 底114, 高2.5	製	不良(牛)	内外白	通常	9	右	産物類
161	160	製A	A	灰原(栗理土)	4F7表土1区・き3Cgr1層・6層・き3Dg2層・き4Bp6層	口115.4, 底113.2, 高2.4	製	良	内外灰	通常	18	右	産物類
162	162	製A	A・D	灰原(栗理土)	4F7表土1区・か4Bp25層+か4Cgr18層・18-27層・き4Bp6層・表土	口116, 底113.3, 高2.6	製	製織	内外灰	通常	25	-	産物類
163	161	製A	A・D	灰原(栗理土)	4F7表土1区・か4Cgr表土・盛土	口116, 底112.6, 高2.4	製	製織	内外灰	通常	8	-	産物類

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	色調	構成	色調	出土	完 存	種 類	特記 (重七様式・焼痕等)
164	155	甗A	A	灰原	き4gr6層+お4gr甕土+表 土1区	口15.8, 底12.8, 高3	製	良好	内灰白・外青灰	通常	26	-	重箱型
165	141	甗A	D	灰原	き4gr23層+き4gr22層+ 7F積石+か4gr23層+か 4gr11層	口15.8, 底13.5, 高2.5	製	弊織	内外両青灰	通常	18	-	重箱型
166	142	甗A	D	灰原	き4gr1層+24層	口117.8, 底11.9, 高2.5	製	弊織	内内灰白	通常	11	-	重箱型?
167	147	甗A	D	灰原	き5gr6層+7F積石+上比 け	口16, 底14, 高2.4	製	良好	内内灰白	通常	14	-	重箱型?
168	151	甗A	D	灰原	か4gr21層+18・27層	口16.2, 底13.9, 高2.4	製	良好	内灰, 外灰白	砂多	20	右	重箱型
169	135	甗A	D	灰原	き4gr6層+22・22層	口117, 底114.6, 高2.5	製	良	内内灰白	通常	13	-	重箱型
170	158	甗A	A	灰原	か4gr10層+き3gr6層	口116, 底113.6, 高2.3	製	少不 良(平盤)	内内灰白+明赤灰	砂少	17	-	重箱型
171	145	甗A	D	灰原	き4gr26層	口116.5, 底113.8, 高2.3	製	良好	内内灰	通常	16	-	重箱型
172	136	甗A	D	灰原	き4gr21層	口116.2, 底113.6, 高2.5	製	不良(不 良)	内内灰	通常	15	-	重箱型
173	130	甗A	D	灰原	き4gr18層	口116.8, 底114.3, 高2.5	製	少不 良(不 良)	内内灰白	通常	14	右?	重箱型
174	15	甗B	A	目1栗床+1 2栗床	4層2次床 4層1次床 2次床7 層	口120.2, 台112.2, 高 3.2, 台高0.7	製	疵(2次焼熟)	内青灰, 外青灰	通常	7	右	底外回転式?
175	14	甗B	A	目1栗床	4層2次床12層	口123, 台115.2, 高3.1, 台高0.6	製	疵(2次焼熟)	内青灰, 外青灰	砂多	6	-	重箱型
176	13	甗B	A	目2栗床	4層40層	口119.1, 台114.2, 高 3.4, 台高0.5	製	疵(2次焼熟)	内青灰, 外青灰	砂多	13	右	底外回転式?, 底外内記 字「1」?
177	30	甗B	A	身底状? → 身底上層1・9・10層	4層40層+身底床下1・F層+ 栗原土9・10層	口120.4, 台114, 高3.6, 台高0.6	製	疵(2次焼熟)	内内灰	通常	20	右	重箱型?, 底外回転式?
178	201	甗B	A	SK01	SK1-64・C区	口119.5, 台115.5, 高 3.5, 台高0.5	製	弊織	内灰白, 外灰	通常	2	-	重箱型
179	165	甗B	A・D	灰原(+栗原土)	4層表土1区+か4gr18・21層+ き5gr6層	口121, 台115.7, 高3.8, 台高0.7	製	良好	内内灰	通常	16	右	重箱型, 底外回転式?
180	66	甗B	A・D	灰原	き3gr2層+か4gr21層+ 4gr22・22層+き4gr22層+ 調D区灰原土	口120, 台114, 高3.6, 台高0.6	製	弊織	内内灰白	通常	10	右	重箱型, 底外回転式?
181	166	甗B	A・D	灰原(+栗原土)	4層表土1区+お4gr甕土+か 3gr調D区灰原土	口120, 台115.4, 高3.5, 台高0.6	製	少不 良(平盤)	内内灰(底内 外明赤灰)	通常	19	右	重箱型, 底外回転式?
182	171	甗B	D	灰原	き4gr1層+24層+25層+ お4gr18層+22・22層	口119.8, 台114.8, 高3.8, 台高0.4	製	良	内灰白, 外灰	通常	21	右?	底外内記字「1」
183	170	甗B	D	灰原	き4gr25層	口119.5, 台115, 高3.5, 台高0.7	製	良	内内灰白	通常	10	右	重箱型
184	168	甗B	D	灰原	お4gr23層+お4gr21層	口120, 台114.8, 高3.5, 台高0.6	製	弊織	内外両青灰	通常	14	右	重箱型, 底外回転式?
185	174	甗B	D	灰原	き4gr1層+23層+28層	口119.8, 台114.6, 高 3.5, 台高0.6	製	良好	内内灰, 外青灰	砂多	5	右	重箱型, 底外回転式?
186	173	甗B	D	灰原	か4gr18層	口121.2, 台116, 高3.6, 台高0.5	製	弊織	内内灰白	通常	11	-	重箱型, 底外回転式?, 底外内記字「1」?
187	167	甗B	A	灰原	か4gr13層	口121.8, 台116.8, 高 3.4, 台高0.7	製	良好	内内灰白	通常	16	-	重箱型
188	164	甗B	A	栗原土	4層E区+H区10層+H区13 層+盛土2区	口122.4, 台115, 高3.8, 台高0.6	製	良好	内外両青灰	通常	9	左	重箱型, 底外回転式?
189	68	甗B	A	灰原	き4gr6層+調A区表土1	口119.4, 台113.2, 高 3.2, 台高0.7	製	弊織	内灰白, 外明赤	通常	14	右	底外回転式?
190	67	甗B	D	灰原	か4gr23層+調D区灰原土	口119.2, 台113, 高3.4, 台高0.6	製	疵(2次焼熟)	内内灰, 外青灰	通常	11	左	底外回転式?
191	169	甗B	D	灰原	き4gr22層+22・22層+25 層+か4gr21層	口119.8, 台14.7, 高4.3, 台高0.7	製	弊織	内内灰白	通常	10	右	重箱型, 底外回転式?
192	172	甗B	A	灰原	き3gr16-16層+114層+き 4gr14層	口121, 台116.4, 高4, 台高0.7	製	少不 良(平盤)	内白, 外白+灰	通常	25	右?	重箱型, 底外回転式?, 内高白粉着痕
193	283	甗B	D	灰原	調D区灰原土	口114.5, 台117, 高 3.9, 台高0.7	製	弊織	内灰白+外灰	通常	4	右	重箱型, 底外回転式?, 内高白粉着痕
194	27	高型	A	身底状? → 身底上層2	口119.8, 底12.3	製	良好	内外両青灰	砂多	13	右	重箱型, 底外回転式?	
195	95	高型	A・D	灰原	き4gr6層+22層+25層+ お4gr22層+お4gr24層+ 調A区灰原土	口119.8, 脚10.2, 高 10.2, 脚高7.3	製	良	内外両青灰+灰	砂多	11	右	重箱型, 底外回転式?, 脚外特 注
196	299	高型	D	灰原	お5grお3層	脚11.4, 高8.4	製	弊織	内内灰白	砂多	脚 6	-	外特注
197	93	高型	D	灰原	お4gr23層+か4gr23層+ 調D区灰原土	口20.1, 高(2.7)	製	良好	内灰, 外明赤	通常	23	右	重箱型, 底外回転式?
198	94	高型	D	灰原	お4gr6層+調D区灰原土	口20, 高(2.3)	製	良好	内灰, 外明赤	砂多	16	右	重箱型, 底外回転式?
199	96	高型	D	灰原	か4gr23層+お4gr22層 +お5gr灰原土	口20, 高(3.1)	製	良好	内内灰	砂多	9	右	重箱型, 底外回転式?
200	238	鉢F	D	灰原	き5gr6層+7F積石+上比 け+お5gr灰原土	口16.7, 底12.4, 高 19.3	製	良	内外両青灰	砂多	8	右?	回転未切り。内内灰, 物付 付着。容量2.4リ
201	239	鉢F	A・D	灰原	き3gr1層+14層+表土1 調D区灰原土	口117.2, 高(16.9)	製	良好	内外両青灰	砂多	8	-	内外外灰, 砂かみ大
202	235	鉢F	D	灰原	お4gr22層+お5grお3層+ 灰原土	底11.8, 高(4)	製	少不 良(平盤)	外灰+灰白	通常	底 19	右	回転未切り。底外内先明 赤+不明赤?
203	236	鉢F	D	灰原	お4gr18層+か4gr19層+ 灰原土	底11.4, 高(1.4)	製	少不 良(平盤)	外灰+灰白	通常	底 25	右	回転未切り。底外内先明 赤?
204	234	鉢F	A・D	灰原	お4gr6層+盛土1	底19.3, 高(7.4)	製	良好	内外両青灰+灰白	通常	底 22	右	回転未切り。少先脚土 底内内灰, 物付付着
205	237	鉢A (把手)	A	灰原	か4gr13層	高(4.7)	製	疵(2次焼熟)	内内灰, 外青灰	通常	-	-	破面15°(転用可か)。物 付付着
206	253	甗A	A	SK01	SK1-103・C区3層	口19.5, 脚4.8, 高(10.3), 脚高10.3	製	良	内内灰白	砂多	25	右	脚外4条注痕, 脚外脚 跡。物付付着
207	272	甗A	A	SK01	SK1-36・48・83・84・87・ 89・92・C区1層	口19.3, 脚5, 脚16.2, 底119.9, 脚高10	製	良好	内内灰, 外青灰	砂多	16	-	脚外2条注痕, 脚接合A3 型
208	242	甗A	A	栗原土	4層Q区28層+54層28層+ 手付?	口19, 台8, 脚5.1, 脚 16.4, 高22.8, 台高1.2, 脚高10.5	製	良好	内灰白, 外明 赤+灰白	砂多	22	右	脚外4条注痕, 脚外A3 型, 脚外下回転式?, 脚接合A3型, 容量1.0リ
209	241	甗A	A・D	灰原(+栗原土)	4層盛土1区+か4gr1層	台8.2, 脚4.7, 脚16.8, 高(12.5), 台高1.1	製	良好	内内灰, 外明赤	砂多	台 36	-	脚外1条注痕, 脚外下 回転式?, 脚接合A3型, 容量1リ
210	210	甗A	A・D	灰原	お4gr13層+6層+調D区 灰原土	台110, 脚117.3, 高 112.4, 台高1.5	製	良好	内外両灰白	砂多	台 13	-	脚外1条注痕, 脚接合A3 型

施設No.	発掘No.	副種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	作部	焼成	色調	胎土	完成	特徴(重ね焼き・地味等)		
211	211	瓶A	A	灰原	き4Agr6層	台8, 頸5, 胴15.8, 高11.1, 台高2.2	製	良好	内灰中-7, 外明青灰-灰白	砂多	右	頸外1条沈線, 胴結合A3類, 容量3.84L		
212	296	瓶A	D	灰原	き4Dgr18層	胴14.9, 胴16.4, 高14.2	製	良好	内灰白, 外灰	通常	右	- 胴結合A2類		
213	212	瓶A	A・D	灰原	か4Agr1層+6層+か4Cgr1層+き4Dgr1層	台8.4, 高6.2, 台高1.1	製	良好	内内外白	砂多	右	胴外下凹記「7」		
214	278	瓶D	A・D	Ⅱ2栗原(+灰原)	4R7・11・底・1表土+き4Dgr1層	底9.7, 胴15.2, 高10.1	製	型織	内灰白, 外明青灰	通常	底	胴外2~3条沈線, 胴外下凹記「8」, 容量2.37L		
215	273	瓶D	A	SK01(+栗原土)	4R7頸土+Ⅱ2区+き4Dgr1層+22層+1層+14層+き5Agr6層+SK07区13層	底10.2, 胴18.2, 高17.4	製	型織	内灰中-7, 外明青灰	砂多	底	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴外A3類, 胴外1条沈線		
216	240	瓶D	A・D	灰原+SK07(+栗原土)	4R7頸土+Ⅱ2区+き4Dgr1層+22層+1層+14層+き5Agr6層+SK07区13層	底9.5, 胴16.3, 高17.7	製	良好	内灰白, 外明青灰	砂多	底	右	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴外A3類, 胴外1条沈線, 容量2.37L	
217	209	瓶D	D	灰原	き4Dgr24層	口9.4, 底9.5, 頸5.8, 胴18.2, 高23.3, 頸高5.7	製	良好	内灰中-7, 外明青灰-灰白	砂多	左	胴外2条沈線, 胴外3条沈線, 胴外A3類, 胴外1条沈線, 容量2.37L		
218	204	瓶D	A・D	灰原	き3Cgr1層+14層+き4Dgr1層+6層+14層+き4Dgr18層	口8.9, 底0, 胴6, 胴16.1, 高124.2, 頸高5.8	製	良好	内陶灰, 外明青灰	砂多	11	- 胴外13~4条沈線, 胴結合A3類, 胴外結合(坯蓋)付着, 容量2.22L		
219	205	瓶D	D	灰原	か4Agr18層+21層+き4Agr22層+24層+き4Dgr21層	胴17.2, 高19.5	製	良好	内灰白, 外明青灰	通常	製	36	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴結合A3類, 胴外結合(坯蓋)付着, 容量2.22L	
220	243	瓶D	A	栗原土	4R7M区-N1C19層-O1区9層+36層-R1区28層+877r+盛土3	口8.2, 底12.3, 頸5.9, 胴19.9, 高29.7, 頸高6.6	製	良好	内灰白, 外青灰	砂多	32	右	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴結合A3類, 容量3.84L	
221	202	瓶D	A・D	灰原	き3Cgr6層+き3Dgr6層+き4Agr6層+18層+24層+き4Dgr23層+か4Agr1層+6層+か4Agr18層+18-27層+21-20層+21-25層+21層+か4Dgr18層+か5Dgr1層	口12.3, 底12.4, 頸7.8, 胴21, 高35.4, 頸高5.6	製	良好	内灰中-7, 外明青灰-灰白	通常	36	右	胴外下凹記「7」, 胴外3~4条沈線, 胴結合A3類, 容量5.55L	
222	207	瓶D	A・D	灰原	き4Agr22層+25層+き4Dgr1層	口111.6, 胴16.2, 高6.7, 頸高6.9	製	型織	内灰中-7, 外灰白	砂多	6	-	胴外2条沈線, 胴結合B類, 容量4.97付着	
223	208	小型瓶D	D	灰原	き4Dgr6層+き5Agr6層	口16.3, 頸14.2, 高(4.2), 頸高4.2	製	型織	内灰中-7, 外青灰	砂多	5	-		
224	245	小型瓶D	D	灰原	か4Cgr21層	口15, 高(2.8)	製	良好	内灰白, 外明青灰	通常	6	-		
225	246	小型瓶D	D	(灰原)	き4Cgr灰原表土+盛土	口14, 高(3)	製	良好	内灰白, 外明青灰	通常	9	-		
226	203	瓶D(三耳)	A・D	灰原	き4Agr24層+き4Dgr1層+き4Dgr18層+21層+22-22層+か4Cgr21層	口10.6, 底11.3, 頸7.2, 胴20.5, 高31.3, 頸高6.6	製	型織	内灰白, 外陶灰	通常	30	-	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴外5~6条沈線, 胴内A3類, 胴結合A2類, 容量4.82L	
227	206	瓶D(三耳)	A・D	灰原	き3Cgr1層+14層+き4Agr22層+き4Dgr14層+き4Dgr18層+21層+22-22層+か4Cgr18層+18-19層+18-27層+21層+か4Dgr19層	口110.7, 頸16.4, 胴20.1, 高(30.2), 頸高6.8	製	型織	内内外白	通常	21	右	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴外A2類, 胴内外灰, 胴結合A2類?	
228	193	壺蓋A	A・D	SK01+灰原	SK1-94+き4Dgr6層	口110.4, つ33.4, 高5.1, つ高2.0	製	(2次焼成)	内灰白, 外灰	通常	5	-	内凹記「1」, 外凹記「×」, 容量1.94L	
229	102	壺蓋D	灰原	き4Dgr18層+き4Dgr灰原内	口112, つ14.1, 高(5.2), つ高(2.4)	製	型織	内明青灰, 外灰(1層付)	砂多	5	-	容量1.75V(4/2)		
230	101	壺蓋A・D	灰原	か4Agr18層+18-27層+か5Dgr23層	口110.8, つ12.5, 高(5.3), つ高(2.3)	製	型織	内内外白	通常	9	-	大耳凹記付着		
231	100	壺蓋A・D	灰原	き4Agr23層+き4Dgr1層+19層	口115, つ13.8, 高(5.4), つ高(2)	製	型織	内内外白	砂多	9	-			
232	99	壺蓋A・D	灰原	き4Agr13層+6層+か4Agr6層+か4Cgr18層+21層	口15.6, つ3.9, 高6, つ高2.9	製	型織	内内外白	砂多	20	-	大耳凹記付着		
233	98	壺蓋A・D	灰原	き4Agr1層+18層+25層+き4Dgr13層	口15.2, つ3.7, 高5.9, つ高3	製	型織	内内外白	砂多	25	-			
234	104	壺蓋D	灰原	き4Dgr22層+19層+き5Agr1層付着	口20, つ5.6, 高8.3, つ高4.8	製	(2次焼成)	内内外白	砂多	12	左	大耳凹記付着, 内凹Da類, 外凹1層付着		
235	217	壺A	A・D	栗原土+灰原	4R7区5層+2層+か4Cgr18層+21層+18-27層+21-20層+か4Dgr20-21層	口110.8, 頸11.2, 胴12.4, 高(20.8), 頸高1.7	製	型織	内内外白	砂多	36	右	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 胴外A3類, 容量3.84L	
236	265	壺A	A・D	栗原土+灰原	4R7区5層+き4Agr18層+6層+き4Agr灰原+調子区灰土+調子区盛土	口18.3, 台8.4, 胴18.7, 頸17.6, 高16.4, 台高1.5, 頸高1.3	製	良好	内陶灰, 外青灰	砂多	9	-	凹記付着, 胴外1条沈線, 蓋輪高, 容量1.94L	
237	267	壺A	A	栗原土+灰原	4R7区3層+き4Agr23層+盛土1	台11.2, 高(7)	製	型織(一部陶化)	内陶灰	砂多	台	7	-	底外凹記付「×」
238	223	壺A	D	灰原	か4Cgr21層+21層+き4Dgr18層+21-21層+22-22層+7r積査	口10.2, 台9.8, 頸11.1, 胴21.6, 高21.8, 高2.8, 頸高1.7	製	型織	内内外白	通常	36	右	胴外1条沈線, 胴外下凹記「7」, 胴内外灰, 容量3.84L	
239	213	壺A	D	灰原	か5Cgr28層+盛土+き4Dgr6層	口18.3, 台10.4, 胴18.7, 頸18.7, 高16.7, 頸高1.5, 台高1.2	製	良好	内陶灰, 外明青灰	砂多	10	右	胴外下凹記「7」, 胴外2条沈線, 蓋輪高, 容量2.19L	
240	214	壺A	D	灰原	か4Cgr23層+か4Dgr1層+き4Dgr22層+調子区灰土	口19.3, 頸19.8, 高(向), 頸高1.7	製	型織	内灰中-7, 外明青灰	通常	22	-	胴外1条沈線, 蓋輪高, 胴外下凹記「7」, 胴外付着, 容量3.84L	
241	245	壺A	A・D	灰原	き3Dgr6層+き4Agr13層+き4Cgr18-27層+24層	口18.8, 頸19.0, 胴18.5, 高(8.1), 頸高2.1	製	型織	内灰白, 外陶灰	通常	10	-	胴外3条沈線, 蓋輪高	
242	222	壺A	A	栗原土	4R7区9-10層	高(8.9)	製	型織	内灰白, 外灰	砂多	-	右	胴外下凹記「7」, 底外凹記「×」	
243	264	壺F	A・D	栗原土+灰原	4R7区3層+Ⅱ区+き4Dgr14層+灰原表土+盛土1+1層付着	口118.4, 底113.8, 胴116, 頸125.7, 高(26.2), 頸高3.6	製	良好	内灰中-7, 外明青灰-灰白	砂多	9	-	外耳+胴外下凹記「7」, 内凹r, 容量8.34L	
244	266	壺F	A・D	栗原土+灰原	4R7区5層+か4Cgr18-27層+1層+23層+き4Agr1層+3層+4層+7層+き4Dgr23層	口118.2, 頸115.9, 胴21.7, 高(12.3), 頸高3.5	製	型織	内黒灰-2, 外明青灰-灰白	通常	18	-	胴外付着の一部付	
245	233	壺F	A・D	SK01+栗原土(+灰原)	SK1-35-4R7区r+Ⅱ区10層+1-3r4R7区r+灰原表土	底19.8, 高(12.2)	製	良好	内灰中-7 GV6(2~5/2), 外明青灰	砂多	18	左	胴外下凹記「7」, 底外凹記付着	
246	221	壺F	A	栗原土	4R7M区	口112.3, 頸112.2, 高6.9, 頸高2.2	製	良好	内灰中-7, 外灰	砂多	10	-	胴外1条沈線, 内内外灰	

掲載No.	実測No.	建物名	区	地点	取付詳細	法量 (cm)	性状	構成	色調	散土	貯蔵	備考 (遺構・地蔵・埋蔵物)
247	250	道F	D	灰原	※4kgp24層	口109, 頂102, 高3.6, 頂高1.8	製	型織	内外明青灰	砂多	12	- 埋内1号沈殿
248	216	道F	A	灰原	※4kgp2-3層+6層+7-4層+※4kgp14層	口114.4, 頂112.7, 頂119.4, 高118.2, 頂高2.3	製	良好	内外明青灰	砂多	15	- 埋内1号沈殿?、埋内外材?
249	219	道F	A	築理土	4kg17区13-16層	口114, 底8.5, 頂10.8, 頂10.7, 高20.8, 頂高2.1	製	良	内陶瓦、外青灰	礫多	30	- 埋内外材、埋内下3層、埋内下3-4号沈殿、埋内外陶瓦1層(含付着、容量3.4L)
250	224	道F	D	灰原	※4kgp22層+23層+※4kgp19層+21-22層+23層+※4kgp22層+※4kgp19層	口12, 底8.8, 頂11.3, 頂10.3, 高20, 頂高2.3	製	良	内外灰白	砂多	30	- 埋内外材、埋内下2層、埋内下1層?付着、容量3.24L
251	218	道F	A-D	築理土	4kg17区-M区-R区26層+7層+盛土1区+調A区盛土+調D区表土	口114.8, 底110.4, 頂114.4, 頂121.2, 高20.3, 頂高2.4	製	中~不良	内灰白-7、外明青灰-灰白	砂多	6	- 埋内1号沈殿?、埋内下17.5、内材、底外材?、埋内陶瓦(坏蓋+付着、容量4.1L)、埋内盛土?、容量4.6L
252	254	道E	A	SK01	SK1-74	口120.4, 頂118.3, 頂122.8, 高10.7, 頂高2.4	製	型織	内灰白、外青灰	通常	8	- 埋内外材、埋内付着
253	271	道E	A	SK01	SK1-12+23+24+25+26+27+28+32+36	底7.6, 頂10.9, 頂16.1, 高11.2(底)	製	良好	内外明青灰-灰白	砂多	底36	- 埋内1号沈殿?、埋内外材?、埋内下1層、埋内陶瓦、埋内付着
254	251	道E	D	(灰原)	調D区灰原内	口117.6, 頂116.6, 頂121.4, 高14.8, 頂高2.3	製	型織	内灰、外青灰	通常	6	- 埋内1号沈殿
255	230	道E	A-D	灰原(築理土)	4kg+※4kgp13層+※4kgp18層+19層+21-20層+21層+26層+※4kgp18層+24層+25層+※4kgp18層+※5kgp19層+盛土+1層	口117.9, 底13.5, 頂15.8, 頂22.4, 高24, 頂高3.4	製	中~不良	内外明青灰、外青灰	砂多	20	- 埋内1号沈殿、埋内下層圧縮多量、容量5.30L
256	276	橋脇	A-D	SK01-灰原	SK1-41+58+60+65+82+区2層+※4kgp4層+7層	口111.4, 頂110.4, 高15.4, 頂高3.6	製	良好	内外明青灰	礫多	20	- 外99H He型-特1、内埋内?、埋内
257	255	小渠	A	SK01	SK1-4	口117.4, 頂115.1, 高17.5, 頂高4.2	製	良	内外灰白	砂多	15	- 埋内内当て具SD型
258	277	小渠	A-D	灰原-SK07	※4kgp13層+※4kgp23層+※4kgp18層-SK07A区13層	側125.2, 高124.5	製	型織	内灰-灰白、外明青灰	砂多	-	- 外99H He型-特1、内当て具Da型-特1、埋内付着
259	231	小渠	A-D	灰原	※3Dgr6層+盛土+※4kgp14層+23層+※4kgp23層+※4Dgr22層+※5kgp28層	口118.4, 頂17.1, 頂20.6, 高13.9, 頂高3.6	製	良好	内外付-7、外明青灰	礫多	32	- 埋内下99H He型、埋内外材?
260	232	小渠	A-D	灰原	※4kgp1層+※4Dgr6層+灰原表土	口114.3, 頂112.6, 頂121, 高12, 頂高2, 頂高2.4	製	良好	内外付-7、外明青灰	砂多	15	- 埋内下99H He型、埋内外材?、容量4.72L
261	247	中渠	A-D	SK01-灰原+築理土	SK1C区-4kg17区9層+L1区9層+M区-N区9層+Q区20層+R区28層+R1区28層+S区28層+埋内+盛土+※4kgp13層+※4kgp1層	口125.2, 頂122.3, 側142.7, 高46.3, 頂高4.5	製	型織	内陶瓦、外灰白	通常	21	- 外99H He型-特1、内当て具Da型-埋内一部付着、容量31.36L
262	248	中渠	A-D	灰原+築理土	4kg17区-A1区2層+N区9層+※4kgp19層+※3kgp1層+6層+※5Dgr18層+21層+※4kgp22層	口125.2, 頂123, 側146, 高34.8, 頂高4.5	製	良好	内灰-暗灰、外明青灰-灰白	通常	13	- 外99H He型-特1、内当て具Da型
263	229	中渠	D	灰原	※4Dgr6層	口126.1, 頂122, 高17.2, 頂高4.5	製	良好	内外明青灰	砂多	7	- 230土留+、埋内99H He型、埋内内当て具Da型、砂がみみ
264	228	中渠	A	灰原	※3kgp1-14層+※3Dgr2層6層+※4kgp1層+盛土1	口127.8, 頂125.5, 高17.1, 頂高3.9	製	良好	内外灰白	通常	12	- 埋内99H He型、埋内内当て具Da型、砂がみみ
265	249	中渠	A-D	灰原	※4kgp1層+※4kgp18層+19層+21層+※4kgp24層+※5kgp1層+18層+※5kgp24層+※4kgp1層+※5Dgr18層	口128.7, 頂123.4, 側145.2, 高127.8, 頂高4.3	製	良好	内灰付-7、外明青灰-灰白	通常	14	- 外99H He型-特1、内当て具Da型-埋内
266	252	中渠	A	灰原+築理土-SK07	4kg17区+※4kgp1層+13層+※4kgp13層+14層+※4kgp18層+21層+18-27層+※4Dgr18-27層+※5kgp18層+21層+※4kgp18層+24層+※4kgp1層+※4kgp18層-SK7C区13層	口129.1, 頂124.5, 側140.6, 高129.6, 頂高4.4	製	型織	内外灰-陶瓦、外明青灰-灰白	通常	30	- 外99H He型-特1、内当て具Da型
267	226	長瀬釜	D	灰原	※4kgp23層+7号積造+※4kgp1層	口121.4, 頂117.6, 側120.2, 高119.9, 頂高2.6	製	良好	内灰、外明青灰	礫多	13	- 土留跡、埋内下99H He型、埋内内当て具Da型-埋内
268	227	長瀬釜	A	灰原	※3kgp1層+※4kgp14層	口118.3, 頂115.4, 高16.6, 頂高2.5	製	良好	内灰、外明青灰	礫多	12	- 土留跡、埋内内材?、埋内外材?
269	300	長瀬釜	A-D	灰原	※4kgp1層+※4kgp13層+※4Dgr21-22層	口119.6, 頂117, 側120.1, 高114.7, 頂高2.5	製	良好	内外灰白	砂多	12	- 埋内99H He型、埋内内当て具Da型
270	225	長瀬釜	A-D	灰原	※4kgp6層+※4Dgr18層+※4kgp灰原+盛土	側108, 高122.4	製	良好	内外灰	礫多	-	- 土留跡、埋内99H He型-特1、埋内内当て具Da型
271	281	長瀬釜(土留跡)	D	灰原	※4Dgr6層	口125.3, 頂122.7, 高17.2, 頂高1.7	製	良好(酸)	内法調1(OY88/3)、外黄灰(10Y88/4)	礫多、砂がみみ、含有	4	- 口埋内1号沈殿、埋内1-2号沈殿、埋内外材?
272	282	長瀬釜(土留跡)	D	灰原	※5Dgr18層+※5kgp1層	口124.8, 頂123.1, 高14.2, 頂高2.8	製	良好(酸)	内法調1(OY88/3)、外黄灰(10Y88/4)	礫多、砂がみみ、含有	4	- 口埋内材?
273	280	壺(土留跡)	D	(灰原)	※4kgp灰原内	底115.9, 高110.6	製	良(酸)	内法調1(OY88/3)、外黄灰(10Y88/4)	礫多、砂がみみ、含有	底6	- 外99H He型-特1、内材?
274	244	壺	D	(灰原)	調D区灰原内	口128.2, 頂125.1, 高17.6, 頂高2.6	製	良	内外灰白、外明青灰	礫多	5	- 埋内1号沈殿、埋内外材?
275	279	壺A(転用塔台)	A	角状礎石+壺	4kg17層上層35	778.5, 高15.3(全高6.6), 高さ1	製	転(2次沈殿)	内灰、外明青灰	砂多	底36	- 底外材?工?、台端跡(転用塔台)
276	262	塔台C	D	(灰原)	※4kgp灰原内付	口18.9, 底11, 高4.5	製	型織	内外灰白	通常	36	- 埋内付着
277	263	塔台B	D	(灰原)	調D区灰原内	口113.9, 側15.2, 高3.5	製	型織	内外陶瓦-灰白	通常	6	- 埋内付着
278	291	塔台A	A-D	(灰原)	調D区表土+※2kgp1層	口17.8, 側9.2, 高2.8	製	転(2次沈殿)	内外灰	砂多	5	- 底外付4個(内陶瓦付+転用塔台)、埋内付着、砂がみみ
279	289	赤彩塔A(土留跡)	A	灰原	※3kgp1-14層+1層	底15.5, 高1.4	製	良好(酸)	内法調1(OY88/4)、外黄灰(10Y88/3)	通常	底17	- 内外赤彩

付章1 その他の遺構

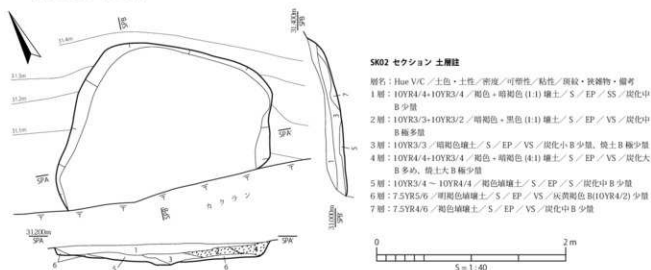
(1) SK02 [不明土坑]

4号窯から東へ約4.5m離れた調査区B区斜面に位置する。南側を掘乱坑によって削られているため全体形状は不明だが、東西2.29m、南北残存1.61m、深さ最大22cmを測り、底面は平坦に近い。2層および4層に炭化物を多量に含む。4号窯に伴うSK01(東西2.85m×南北推定2.89m)と同規模・同形状の土坑であることが推測され、類似した機能が考えられるが、出土遺物がなく時期不明である。

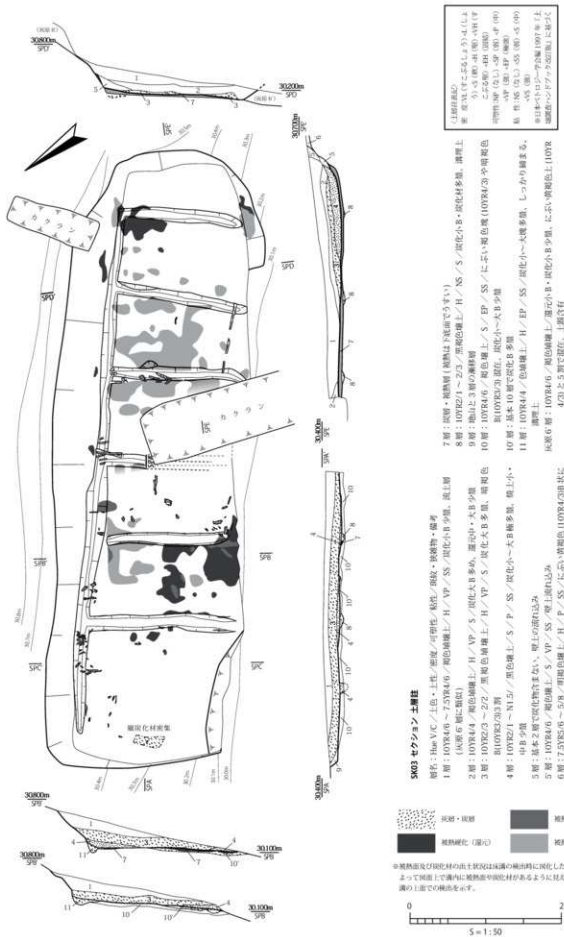
(2) SK03 [製炭土坑]

調査区D区からE-1区にわたって構築された全長8.22m、幅残存1.73～2.55mを測る製炭土坑である。土坑上面および斜面下方の側壁を中心に削平を受けるが、斜面に対して平行に掘削される平面長楕円形の土坑と推定される。斜面下方の側壁については全周せず、斜面を切って平坦面を造成する意図があったのかもしれない。深さ(壁高)はやや不明瞭だが、推定で40～50cm程となる。床面には所々に被熱痕がみられ、焼結硬化する部分もある(暗赤褐色～赤褐色の被熱弱と黄褐色の被熱強は酸化被熱、焼結硬化は還元被熱)。床直上には炭化物を極多量に含む層が覆い、木材の形が分かる炭化材も一部残存する。長軸に沿って並べられた炭化材に関しては、炭焼きの痕跡を示す可能性がある。床下には排水溝と思われる深さ10cm程の浅い溝が斜面上方側の壁際を巡るとともに、その溝から分岐してさらに6本の溝が長軸に直交して延びる。溝内には灰が充填され、部分的に炭化材も残る。溝底はいずれも被熱を受けず、所々肩部のみ被熱を受ける。炭化材の年代測定では11世紀前半～12世紀中頃の値が得られ、樹種同定では数種類の広葉樹材利用が明らかになった。詳しくは付章2を参照されたい。遺物は上層からわずかに須恵器の盤A・裏胴部片・専用焼台(B類)を確認しているが、おそらく5・6・13号窯からの混入と考えられる。

周辺の類別をあげると、二ツ梨豆岡向山窯跡群A地区のSK02(VI期頃)、二ツ梨一貫山窯跡の2号炭窯(VI₂期)・3号炭窯(VI₂期～VI₃期)、林遺跡の1号木炭窯(10世紀以降)・4号木炭窯(時期不明)があり、時期不明を除いて9世紀末～10世紀より古くなる事例はない。斜面に直交する一貫山3号例以外は今報告例と同様に全て斜面に平行あるいはやや斜めに構築される。床溝は壁際や長軸に平行するものはあるが、今報告例のような直交は認められなかった。いずれも地上式や半地下式の構造をもつものであり、地下掘り抜き式の須恵器窯や炭窯とは異なる技術が導入されたことを示唆するものである。



第25図 SK02 平面図・断面図



第26図 SK03平面図・断面図

付章 2 自然科学分析

第 1 節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadize・小林克也

1 はじめに

石川県小松市に所在する二ツ梨豆岡向山窯跡群から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている (樹種同定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、3 次調査 D 区～E-1 区の製炭土坑である SK03 から出土した炭化材 3 点 (試料 No.73 : PLD-31692、試料 No.81 : PLD-31693、試料 No.89 : PLD-31694) である。SK03 の時期については、共存遺物がなくて不明であったが、出土した炭化材はすべて同時期に焼かれたと考えられる。いずれの試料も最終形成年輪を測定している。樹種同定の結果、試料 No.73 はエゴノキ属、試料 No.81 はサカキ、試料 No.89 はクマシデ属イヌシデ節であった。測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31692	試料 No.73 調査区: 3 次調査 D 区 - E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材 (エゴノキ属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31693	試料 No.81 調査区: 3 次調査 D 区 - E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材 (サカキ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31694	試料 No.89 調査区: 3 次調査 D 区 - E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材 (クマシデ属イヌシデ節) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-31692 試料 No.73	-29.86 \pm 0.18	925 \pm 18	925 \pm 20	1045-1095 cal AD (42.8%) 1120-1142 cal AD (19.8%) 1147-1154 cal AD (5.6%)	1038-1158 cal AD (95.4%)
PLD-31693 試料 No.81	-31.29 \pm 0.18	924 \pm 18	925 \pm 20	1045-1095 cal AD (42.5%) 1120-1142 cal AD (19.3%) 1147-1155 cal AD (6.3%)	1038-1159 cal AD (95.4%)
PLD-31694 試料 No.89	-28.61 \pm 0.24	984 \pm 20	985 \pm 20	1017-1043 cal AD (55.0%) 1105-1118 cal AD (13.2%)	997-1005 cal AD (1.3%) 1011-1050 cal AD (61.0%) 1083-1126 cal AD (26.7%) 1136-1152 cal AD (6.5%)
			較正年代の統合結果	1037-1048 cal AD (11.7%) 1085-1124 cal AD (43.1%) 1138-1150 cal AD (13.3%)	1030-1056 cal AD (20.4%) 1076-1154 cal AD (75.0%)

4 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。

製炭土坑 SK03 出土の炭化材である試料 No.73 (PLD-31692) は 1038-1158 cal AD (95.4%)、試料 No.81 (PLD-31693) は 1038-1159 cal AD (95.4%) で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。また、試料 No.89 (PLD-31694) は 997-1005 cal AD (1.3%)、1011-1050 cal AD (61.0%)、1083-1126 cal AD (26.7%)、1136-1152 cal AD (6.5%) で、10世紀末～12世紀中頃の暦年代を示した。

これらの試料は製炭土坑から出土した炭の製品または燃料材であると考えられ、同じ時期に焼かれたと考えられる。したがって、各試料の暦年代範囲は近い時期を示すと予想されるため、各試料の較正年代を結合し、重複している箇所を抽出した。計算には、暦年較正用ソフト OxCal に付属する Combine の機能を用いた。結合の結果は、 2σ 暦年代範囲において 1030-1056 cal AD (20.4%) および 1076-1154 cal AD (75.0%) で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは平安時代中期～後期に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

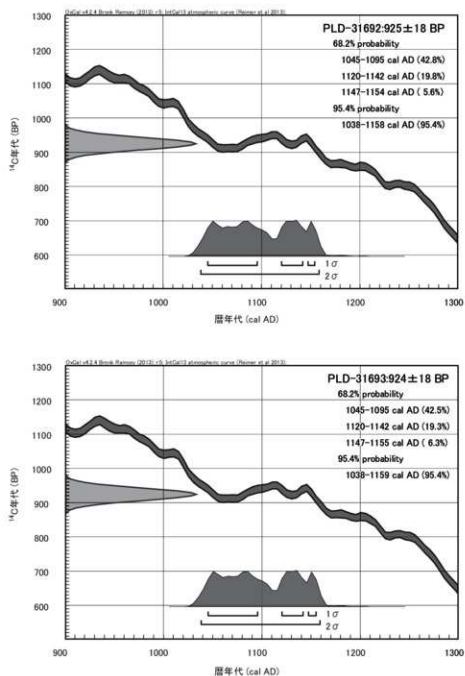


図 1-1 暦年較正結果 (1)

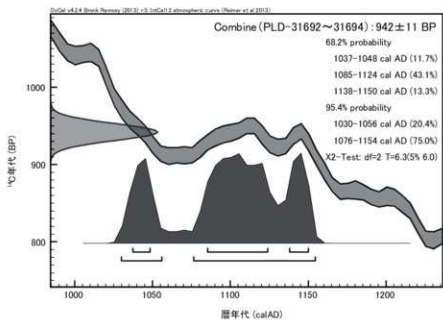
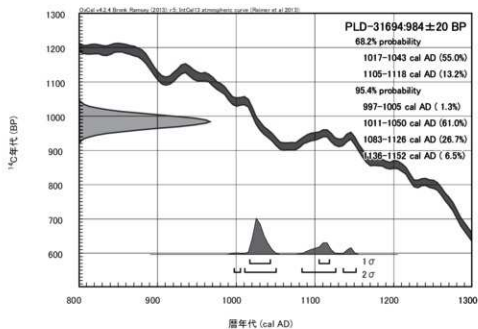


圖 1-2 曆年較正結果 (2)

第2節 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定

小林克也（株式会社バレオ・ラボ）

1 はじめに

ニツ梨豆岡向山窯跡群は、加賀地域最大の須恵器窯跡群である南加賀窯跡群の支群の1つである。ここでは、2次調査および3次調査で出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

2次調査のA地区（以下、2次A地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である1-A号窯跡から7点、1-B号窯跡から9点、2号窯跡から8点、2・1-A・1-B号窯跡から22点、製炭土坑であるSK02から14点、土坑であるSK03から1点、SK07から3点、粘土塊集中2から3点の、計67点。同じく2次調査のB地区（以下、2次B地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である7号窯跡から1点、8号窯跡から11点、7・8号窯跡から1点、土坑であるSK03から1点、グリッドで採取された炭化材1点の、計15点。3次調査（以下、3次と呼ぶ）の試料は、4号窯跡から8点、5号窯跡から7点、6号窯跡から27点、5・6・13号窯跡灰原・前庭部から25点、SJ02から1点、SK03から28点、グリッドから2点の、計98点がみられた。分析試料は、総計で180点となった。

2次A地区の遺構の時期は、2号窯跡が8世紀前半、1-A号窯跡と1-B号窯跡、SK02、SK03、SK07は10世紀前半、2・1-A・1-B号窯跡が8～10世紀、粘土塊集中2が時期不明である。

2次B地区の遺構の時期は、8号窯跡が8世紀前半、7号窯跡とSK03が10世紀前半、7・8号窯跡が8～10世紀で、グリッドで採取された試料は時期不明である。

3次では、4号窯跡が9世紀前半、6号窯跡が9世紀末～10世紀初頭、5号窯跡が10世紀前半、5・6・13号窯跡が9～10世紀、SJ02が8世紀後半～9世紀前半で、グリッドで採取された試料は時期不明である。SK03は、炭化材の放射性炭素年代測定の結果、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。

分析に先立って、計測可能な試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とスギの2分類群、広葉樹ではカバノキ属とクマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節と呼ぶ）、アサダ、クリ、スダジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、ツバキ属、サカキ、サクラ属、カエデ属、ニシキギ属、エゴノキ属、ハイノキ属の15分類群が産出した。

表1 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土の樹種同定結果

樹種	調査年次		2次調査										3次調査								
	地区		A地区					B地区					-								
	1-A	1-B	2	2・1				粘	7	8	グ	4	5	6	5・6		グ				
	号	号	号	A・	SK	SK	SK	土	号	号	リ	号	号	号	・13	SJ	SK				
	遺	跡	跡	窯	02	03	07	中	窯	7・	ッ	窯	窯	窯	号	02	03				
	構	跡	跡	跡				2	跡	跡	ド	跡	跡	跡	跡		ド				
モミ属		2	2	10				3			1		8	2	2	11		41			
スギ	3		8	4		1	3						4	23	13		1	60			
カバノキ属																1		1			
クマシデ属イヌシデ節	1			4					1	1	1				1		5	14			
アサダ				2					2				1				1	6			
クリ				1	6												2	9			
スダジイ														1				1			
ブナ属						3												3			
コナラ属アカガシ垂属				1					3								3	7			
コナラ属コナラ節			7		5													12			
ツバキ属	1																2	5			
サカキ																	5	5			
サクラ属													1				3	4			
カエデ属									5									5			
ニシキギ属																	1	1			
エゴノキ属																	5	5			
ハイノキ属								1										1			
合計	7	9	8	22	14	1	3	3	1	11	1	1	1	8	7	27	25	1	28	2	180

スギが最も多くて60点、モミ属が41点、イヌシデ節が14点、コナラ節が12点、クリが9点、アカガシ垂属が7点、アサダが6点、ツバキ属とサカキ、カエデ属、エゴノキ属が各5点、サクラ属が4点、ブナ属が3点、カバノキ属とスダジイ、ニシキギ属、ハイノキ属が各1点であった。

2次A地区では、1-A号窯跡でスギが3点とモミ属が2点、ツバキ属とイヌシデ属が各1点、1-B号窯跡ではコナラ節が7点とモミ属が2点、2号窯跡ではスギが8点、2・1-A・1-B号窯跡ではモミ属が10点、スギとイヌシデ節が各4点、アサダが2点、クリとアカガシ垂属が各1点みられた。SK02ではクリが6点とコナラ節が5点、ブナ属が3点、SK03ではスギが1点、SK07ではスギが3点、粘土塊集中2ではモミ属が3点みられた。

2次B地区では、7号窯跡でハイノキ属が1点、8号窯跡ではカエデ属が5点とアカガシ垂属が3点、アサダが2点、イヌシデ節が1点、7・8号窯跡ではイヌシデ節が1点みられた。SK03ではモミ属が1点みられた。グリッド出土の炭化材はイヌシデ節が1点であった。

3次調査では、4号窯跡でモミ属が8点、5号窯跡ではスギが4点とモミ属が2点、アサダが1点、6号窯跡ではスギが23点とモミ属が2点、スダジイとサクラ属が各1点、5・6・13号窯跡ではスギが13点とモミ属が11点、イヌシデ節が1点みられた。SJ02ではカバノキ属が1点みられた。SK03ではイヌシデ節とサカキ、エゴノキ属が各5点、アカガシ垂属とサクラ属が各3点、クリとツバキ属が各2点、スギとアサダ、ニシキギ属が各1点みられた。グリッド出土の炭化材は、ツバキ属が2点であった。

復元直径の計測では、全体的に計測が行なえた試料がすくなかったが、2次A地区のSK02では6cm以下の試料が多く、2次B地区の8号窯跡では4～6cmにピークがみられた。また3次の6号窯跡では11～20cmの試料が多く、SK03では6cm以下の試料が多かった。

平均年輪幅の計測結果では、0.96cmある幅の広い試料(試料No.154:スギ)もあったが、ほとんどの試料は0.5cm以下であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版 1 1a-1c(No.2), 2c(No.44), 3c(No.50), 4c(No.166)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 1～12 列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1 分野に 2～4 個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版 1 5a-5c(No.5), 6c(No.25), 7c(No.115), 8c(No.147)

仮道管と放射組織、放射仮道管で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1～10 列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版 1 9a-9c(No.98)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は 10～20 段階程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4 列となる。

カバノキ属にはマカンバやダケカンバ、ウダイカンバなどがあり、代表的なマカンバは北海道から本州北中部の温帯の、日当たりの良い場所に生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で強靱だが、切削加工は容易である。

(4) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版 1・2 10a-10c(No.74), 11a-11c(No.77)

小型の道管が単独ないし 2～7 個、放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、1～4 列となり、集合放射組織がみられる。

クマシデ属イヌシデ節は温帯から暖帯の山林などに分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬く、割裂しにくい。切削加工は中庸である。

(5) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版 2 12a-12c(No.108)

小型の道管が単独ないし 2～7 個、放射方向に複合して密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4 列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版 2 13a-13c(No.85), 14a(No.143), 15a(No.145)

年輪のはじめに大型の道管が 1～3 列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版2
16a-16c(No.38)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(8) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版3 17a-17c(No.133)

小型の道管が単独ないし2~3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1~3列のものと広放射組織がみられる。

ブナ属にはブナやヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版3 18a-18c(No.82)

大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版3 19a-19c(No.137)、20a(No.139)、
21a(No.140)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(11) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版3 22a-22c(No.65)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は10~20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~2列が直立する異性で、1~4列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版3・4 23a-23c(No.70)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は20~40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、単列である。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) サクラ属(広義) *Prunus* s.l.バラ科 図版4 24a-24c(No.91)

小型の道管が単独ないし2~4個、放射方向ないし斜線方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と区別できないため、モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す意味で、広義のサクラ属とした。

(14) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4 25a-25c(No.109)

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～2列のものと幅5～8列程度のものがみられる。

カエデ属は10列以上の放射組織を持つチドリノキ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はチドリノキ以外のカエデ属である。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(15) ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版4 26a-26c(No.76)

小型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～2列が直立する異性で、単列となる。

ニシキギ属にはニシキギやマユミなどがあり、代表的なマユミは、北海道から九州までの山地にみられる落葉高木または小高木の広葉樹である。材は強韌で韌性がある。

(16) エゴノキ属 *Syrax* エゴノキ科 図版4 27a-27c(No.69)

小型の道管が単独ないし2～4個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は晩材部で線状となる。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は1～4列が直立する異性で、1～3列となる。

エゴノキ属は温帯から亜熱帯の低山地、原野に分布する落葉小高木の広葉樹である。材はやや重く、韌性があるが、切削加工などは容易である。

(17) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 図版4 28a-28c(No.99)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～4列となる。

4 考察

以下に、2次A地区、2次B地区、3次の同定結果について個別に考察し、二ツ梨岡向山窯跡群の森林利用および丘陵の植生変化について考える。なお、考察にあたっての炭化材の評価については、須恵器窯跡および灰原、土師器窯跡出土の炭化材は、燃料材の残渣であると考え、製炭土坑出土の炭化材は、焼成された製品としての炭（以下、炭製品と呼ぶ）か、燃料材残渣かの判断ができないため、炭製品または燃料材と表記する。土坑や粘土塊集中、グリッドなどで取り上げられた炭化材については用途不明とした。須恵器窯跡の燃料材や、製炭土坑の炭化材の供給源については、藤原（1992）および小林・北野（2013）に指摘されているように、窯跡周辺の樹木が利用されていると想定した。

・2次調査A地区

須恵器窯跡で、燃料材の同定数の多い窯跡に着目すると、8世紀前半の2号窯跡では針葉樹のみで、10世紀前半の1-A号窯跡では広葉樹よりも針葉樹が僅かに多いが、1-B号窯跡では針葉樹よりも広葉樹が多くみられた（表2）。須恵器窯跡の燃料材は、操業時期の経過と共に燃料材の樹種が針葉樹主体から広葉樹主体へと変化した可能性がある。また、10世紀前半の製炭土坑であるSK02で

表2 2次調査A地区の樹種同定結果

樹種	種類	時期			炭製品か			合計	
		8C前半		10C前半	8~10C		不明		
		2号 遺構名	1-A号 窯跡	1-B号 窯跡	SK02	SK 03	SK 07		2・1-A・1-B 号窯跡灰原
モミ属			2	2			10	3	17
スギ	8	3			1	3	4		19
クマシデ属イヌシデ節		1					4		5
アサダ							2		2
クリ					6		1		7
ブナ属					3				3
コナラ属アカガシ亜属							1		1
コナラ属コナラ節			7		5				12
ツバキ属		1							1
合計	8	7	9	14	1	3	22	3	67

は、針葉樹はみられず、クリやブナ属、コナラ節、ツバキ属といった広葉樹がみられた。これは1-B号窯跡の燃料材と同様の傾向を示しており、10世紀前半のA地区周辺では、広葉樹が一定数生育していた可能性を示唆する。

須恵器窯跡および製炭土坑の炭化材について復元直径分布をみると、計測不可の試料が多いため試料数は少ないが、須恵器窯跡の2号窯跡では復元直径10cm以上の材がみられるのに対し、1-A号窯跡、1-B号窯跡では復元直径10cm以下の材が多い傾向がみられた。また、1-B号窯跡の復元直径10cm以下の炭化材は、いずれも広葉樹であった。2・1-A・1-B号窯跡の灰原では、復元直径20cmまでの径の材が偏りなくみられた。製炭土坑であるSK02では、復元直径10cm以下の材のみがみられた(図1)。

以上のように、A地区では8世紀前半には復元直径10cm以上のスギが利用され、10世紀前半には復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたという傾向が確認できた。

・2次調査B地区

須恵器窯跡の炭化材に着目すると、8世紀前半の8号窯跡では燃料材・構築材共に広葉樹のみが用いられ、針葉樹は確認できなかった。構築材では、カエデ属のみがみられた。10世紀前半の7号窯跡ではハイノキ属1点のみであった。試料数が少ない窯跡もあるため推測の域を出ないが、2次B地区の窯跡では針葉樹を燃料材としてあまり利用していなかった可能性がある。

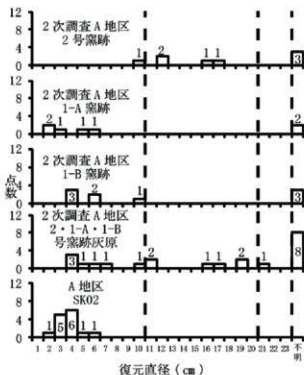


図1 2次調査A地区須恵器窯・製炭土坑の復元直径分布

表3 2次調査B地区の樹種同定結果

樹種	8C 前半		10C 前半		8～10C	不明	合計
	種類	構築材	燃料材	SK3	7・8号窯跡灰原	グリッド	
モミ属				1		不明	1
クマシデ属イヌシデ節		1			1	1	3
アサダ		2					2
コナラ属アカガシ垂属		3					3
カエデ属	4	1					5
ハイノキ属			1				1
合計	4	7	1	1	1	1	15

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、8号窯跡の燃料材では復元直径10cm以下の材が多く、構築材では復元直径4～5cmの材のみがみられた。7号窯跡および7・8号窯跡灰原の試料については、復元直径の計測が行えた試料が少なく、傾向は掴めなかった。

以上のように、B地区では試料数が少ないため推測の域を出ないが、構築材、燃料材ともに復元直径10cm以下の広葉樹が利用される傾向がみられた。

・3次調査

須恵器窯跡および土師器窯跡、製炭土坑に着目すると、9世紀前半の4号窯跡、

9世紀末～10世紀初頭の6号窯跡、10世紀前半の5号窯跡のいずれも、針葉樹が多かった。9～10世紀の5・6・13号窯跡の灰原から出土した炭化材でも針葉樹が多くみられることから、3次調査の須恵器窯跡では、通年で針葉樹を燃料材として多用していたと考えられる。一方、8世紀後半～9世紀前半の土師器窯跡であるSJ02ではカバノキ属が1点みられ、11世紀前半～12世紀中頃の製炭土坑であるSK03では針葉樹は1点のみで、イヌシデ節やサカキを中心とする広葉樹が多くみられた(表4)。須恵器窯跡では針葉樹主体、土師器窯跡および製炭土坑では広葉樹主体で、主体となる燃料材が異なっており、遺構の種類毎に使用する燃料材の樹種が異なっていた可能性がある。ただしSK03は9～10世紀の窯跡よりも100年ほど時期が新しい遺構であり、9～10世紀には周辺の森林に針葉樹が多く分布していたが、SK03が使用される頃には周辺の森林は広葉樹も多く分布する森林へと植生が変化していた可能性も考えられる。

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、試料数の多い6号窯跡では、復元直径10cm以上20cm未満の材が多く、15cmにピークがみられた。また、4号窯跡と5号窯跡では傾向はつかめないが、5・6・13号窯跡灰原では、復元直径1～19cmの材が、偏りなくみられた。土師器窯であるSJ02の炭化材は復元直径5cm、製炭土坑であるSK03の炭化材は、復元直径6cm以下の材のみであり、

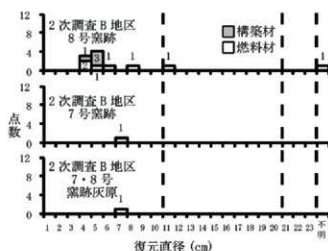


図2 2次調査B地区須恵器窯の復元直径分布

表4 3次調査の樹種同定結果

樹種	8C後半～		9C末～		11C前半～		不明	合計
	時期	9C前半	9C前半	10C初頭	10C前半	9～10C		
遺構	SJ02	4号窯跡	6号窯跡	5号窯跡	窯跡灰原・前庭		SK03	グリ ツド
種類		燃料材		燃料材?		炭製品か		
						燃料材	不明	
モミ属		8	2	2	11			23
スギ			23	4	13	1		41
カバノキ属	1							1
クマシデ属イヌシデ節					1	5		6
アサダ				1		1		2
クリ						2		2
スタジイ			1					1
コナラ属アカガシ亜属						3		3
ツバキ属						2	2	4
サカキ						5		5
サクラ属			1			3		4
ニシキギ属						1		1
エゴノキ属						5		5
合計	1	8	27	7	25	28	2	98

ピークは3cmであった(図3)。

以上のように3次調査の須恵器窯跡では、6号窯跡にみられるように、復元直径10cm以上のスギが多用される傾向がみられたが、土師器窯跡および製炭土坑では、復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたのが確認できた。

・二ツ梨豆岡向山窯跡の森林利用

および丘陵の植生変化について

遺構ごとの主要燃料材を時期順に示した表を表5に示す。

8世紀前半操業の須恵器窯跡は、2次A地区2号窯跡と2次B地区8号窯跡であるが、燃料材の主体となる樹種をみると、前者はモミ属とスギといった針葉樹、後者は広葉樹であった。窯跡周辺の樹木を燃料材として伐採利用していたと考え、8世紀前半頃の2次A地区と2次B地区では、窯場周辺の植生が異なっていた可能性がある。

次に、9世紀前半に操業がはじまる3次の4号窯跡、9世紀末～10世紀初頭の3次の6号窯跡、10世紀前半頃の3次5号窯跡では、モミ属およびスギ

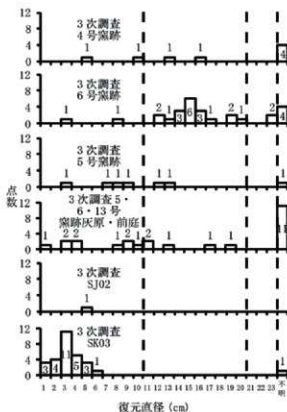


図3 3次調査須恵器窯・製炭土坑・土師器窯跡の復元直径分布

表5 時期別主要燃料材(※■は同定数が多い樹種)

時期	遺構の種類	窯跡名称	樹種		
			モミ属	スギ	広葉樹
8C 前半	須恵器窯跡	2次A地区2号窯跡		8	
8C 前半	須恵器窯跡	2次B地区8号窯跡			11
9C 前半	須恵器窯跡	3次4号窯跡	8		
9C 末~10C 初頭	須恵器窯跡	3次6号窯跡	2	23	2
10C 前半	須恵器窯跡	3次5号窯跡	2	4	1
10C 前半	須恵器窯跡	2次A地区1-A号窯跡	2	3	2
10C 前半	須恵器窯跡	2次A地区1-B号窯跡	2		7
10C 前半	製炭土坑	2次A地区SK2			14
10C 前半	須恵器窯跡	2次B地区7号窯跡			1
11C 前半~12C 中頃	製炭土坑	3次SK03		1	27

が多くみられた。いずれも3次調査の窯跡であり、9世紀前半~10世紀前半頃の窯場周辺にはモミ属やスギといった針葉樹が多く生育していた可能性がある。

10世紀前半の2次A地区1-A号窯跡ではスギ、2次A地区1-B号窯跡では広葉樹が多くみられた。また2次B地区7号窯跡では広葉樹のみみられた。2次A地区では針葉樹、1-B号窯跡では広葉樹が多くみられるため、10世紀前半の窯場周辺では針葉樹と広葉樹が共生していた可能性が高い。ただし10世紀前半の製炭土坑である2次A地区SK02では広葉樹のみが出土しており、広葉樹主体の森林の存在を裏付けている。2次B地区は分析点数が少ないため傾向が確認できなかったが、A地区と同様に広葉樹主体の森林が広がっていた可能性がある。

11世紀前半~12世紀中頃の製炭土坑である3次のSK03では、広葉樹が多くみられた。3次調査地点の周辺では、10世紀前半頃までは針葉樹主体の森林が広がっていたと考えられるが、須恵器窯跡の操業終了時には、窯場周辺の針葉樹の大部分が伐採され、広葉樹主体の森林へと変化した可能性がある。

北陸地方の日本海沿岸地域では、金沢市畷田東遺跡群の弥生時代~平安時代にかけての遺構で行われた花粉分析の結果が示すとおり、スギが卓越する(ハリノ・サーヴェイ株式会社, 2006)。よってスギは、人為による植生改変を受けていない森林の指標となりえる樹種である。二ツ梨豆岡向山窯跡群が操業されていた丘陵では、8世紀前半頃は2次A地区のある北西側および3次調査地点の南西側の斜面には針葉樹を主体とする森林が広がり、2次B地区のある北東側の斜面は広葉樹を主体とする森林が広がっていたと考えられる。北西側および南西側の斜面は、窯跡の操業と共に針葉樹が減少し、10世紀前半には北東側の斜面と同様に広葉樹主体の森林に変化していたと考えられる。このような、須恵器窯業や製炭などの手工業生産活動に伴う炭化材が、針葉樹主体から広葉樹主体へと変化するのと同様の状況は、富山県立山町の上末窯谷窯跡の樹種同定結果においてもみられる(林, 1989)。

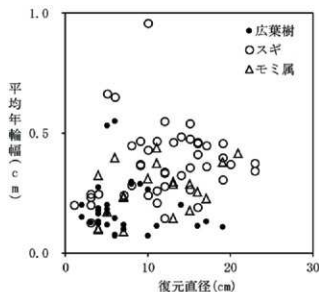


図4 須恵器窯跡の復元直径と平均年輪幅

一方、須恵器窯跡の燃料材の復元直径では、スギは平均年輪幅が比較的広く、復元直径が10cm以上の試料が多くみられるが、広葉樹は平均年輪幅が比較的狭く、復元直径が10cm未満の試料が比較的多くみられる（図4）。つまり、須恵器窯跡の燃料材には、針葉樹であれば10cm以上の径の大きな樹木を、広葉樹であれば10cm未満の径の小さい樹木を選択利用していた可能性がある。なお、製炭土坑出土の炭化材は、いずれも復元直径6cm以下で、平均年輪幅が0.5cm未満の材のみがみられた（図5）。試料が炭製品なのか燃料材なのかの判断はできないが、復元直径のパラつきが少なく、一種の規格性のような、強い選択性がうかがえる。

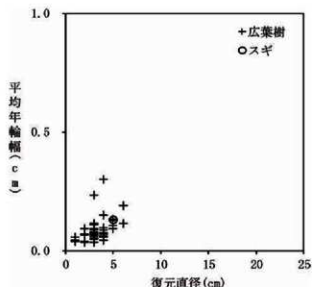


図5 製炭土坑の復元直径と平均年輪幅

上記の植生の変遷および燃料材の直径による選択性を考慮すると、二ツ梨豆岡山窯跡群の須恵器窯跡の燃料材では、8世紀前半に針葉樹を主に利用する窯跡、広葉樹を主体的に利用する窯跡がみられる点を考慮すると、特定の樹種を燃料材として多く利用するため、窯場の選択を窯場周辺の植生で左右するような、強い樹種選択性は確認できなかった。ただし、窯場周辺の森林内から、針葉樹なら直径10cm以上、広葉樹なら直径10cm未満を選択するような、緩い選択性が存在した可能性が考えられる。製炭土坑では、特定の樹種のみを多く利用する傾向はみられなかったが、産出した広葉樹はいずれも薪炭材として普通に利用される樹種であった（伊東ほか、2011）。薪炭材に適した直径6cm以内の広葉樹を選択的に伐採していたと考えられる。

南加賀窯跡群では、二ツ梨一貫山窯跡および林オオカミダニ支群の窯跡等で出土した須恵器窯跡および製鉄関連遺構、土師器窯跡などの炭化材樹種同定の結果により、一つの丘陵で多種の手工業生産を行う場合、生産遺構または生産工程の木材として適した材を選択し、他業種と採取する木材が競合しないような工夫をするのが基本であったと考えられている（望月、2008）。二ツ梨豆岡山窯跡群の炭化材でも同様の傾向が確認できる。

参考・引用文献

- 藤原学（1993）須恵器窯と燃料薪。考古学論叢。関西大学考古学研究室開設四拾周年記念。、495-517。
 林 昭三（1989）越中上末窯出土炭の樹種。富山大学人文学部考古学研究室編「越中上末窯」：209-214。富山大学人文学部考古学研究室。
 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌。238p。海青社。
 小林克也・北野博司（2013）山形県高島町高安窯跡群にみる古代窯業における燃料材選択と森林利用。植生史研究。22（1）、p23-28。
 望月精司（2008）北陸地方の古代窯業・製鉄業の森林利用。東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター編「古代窯業の森林利用技術—陶人と森との関わり—」予稿集：33-44。東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター。
 パリノ・サーヴェイ株式会社（2006）花粉分析等による古環境復元。石川県埋蔵文化財センター編「敵田東遺跡群VI」：4-33。石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター。

付表 1-1 ニツ梨豆岡山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号			
1	1	3次調査		4号窯跡		I区	5層	燃料材	モミ属	1.6	3	-	0.53		9世紀前半				
2	2						表土		モミ属	0.7	3	-	0.23						
3	3						P区		1層	モミ属	2.6	15	5				0.17		
4	4				B区	2層	モミ属	2.2	7	10	0.31								
5	5				5号窯跡		C区	表土	3層	燃料材	スギ	2.9	7				-	0.41	
6	5								モミ属		2.6	9	13				0.29		
7	6								アサダ		0.9	7	3				0.13		
8	8								スギ		2.6	7	9				0.37		
9	7								C区		4・5層	スギ	2.7				6	8	0.45
10	10								モミ属		1.0	11	7				0.09		
11	8								C区		2層	スギ	3.7				11	12	0.34
12	9								C区		7層	スギ	3.2				12	15	0.27
13	13			スギ					1.7		5	-	0.34						
14	10			C区					3層		スギ	4.6	24	16	0.19				
15	11			G区					15層		スギ	2.7	5	15	0.54				
16	12			D区	3層	モミ属	0.9	5	15	0.18									
17	17			F区(伊東東e区)		3層		スギ	2.6	8	14	0.33							
18	13							スギ	3.7	8	16	0.46							
19	19							スギ	1.2	6	-	0.20							
20	20							スギ	3.4	7	14	0.49							
21	14							6号窯跡		F区	中層	スギ	3.2	5	-	0.64			
22	22											スギ	3.5	5	-	0.70			
23	23											スギ	5.2	14	20	0.37			
24	24											スギ	3.4	9	23	0.38			
25	25											スギ	3.1	9	23	0.34			
26	15											D区	3層	燃料材	スギ	3.7	12	19	0.31
27	27			スギ	3.7	8	13								0.46				
28	28			スギ	3.2	7	19								0.46				
29	29			スギ	3.6	10	15								0.36				
30	30			スギ	2.8	10	12								0.28				
31	16			F区	3層		モミ属								5.2	18	15	0.29	
32	32						スギ					5.4	12	17	0.45				
33	33						サクラ属	3.2	11	8	0.29								
34	34						スギ	3.3	8	16	0.41								
35	17			F区	中3層		スギ	2.2	4	12	0.55								
36	36						スギ	4.3	9	15	0.48								
37	18			前庭部	き5-B区	5層		スギ	1.4	11	3	0.13							
38	38							スダジイ	1.0	5	14	0.20							
39	19			灰原		き5-C区	4層		スギ	0.6	2	-	0.30						
40	40								スギ	1.8	9	3	0.20						
41	21								スギ	2.0	8	4	0.25						
42	42					スギ	1.4	6	3	0.23									
43	22					前庭部	灰原・き5-B区	16層		モミ属	0.3	1	-	0.30					
44	23									モミ属	0.3	1	-	0.30					
45	24					5・6・13号窯跡		灰原		き5-A区	1層	燃料材	スギ	0.4	3	-	0.13		
46	25									き5-D区	2層		スギ	0.6	3	1	0.20		
47	26									き5-D区	3層		スギ	0.6	3	1	0.20		
48	28									こ5-A区	-		クマシデ属	0.4	2	-	0.20		
49	29									こ5-C区	3層		イヌシデ節	1.1	6	-	0.18		
50	30									こ5-B区	3層		モミ属	0.5	2	4	0.25		
51	31			こ5-C区	3層					スギ	0.5		2	-	0.25				
52	52			こ5-C区	3層					モミ属	0.5		2	-	0.25				
53	53			し5-D区	13層						スギ		3.9	9	10	0.43			
54	32										スギ		1.7	6	8	0.28			
55	55					モミ属	1.5	5	-		0.30								
56	56					モミ属	2.2	4	-		0.55								
									モミ属	1.8	6	13	0.30						
									モミ属	1.5	4	11	0.38						

付表 1-2 ニツ梨豆岡山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

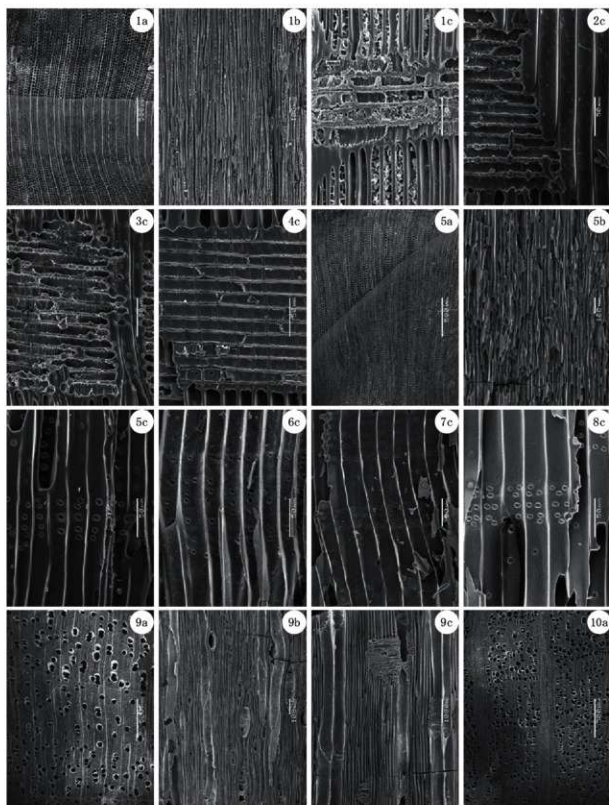
試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号		
57	33		B地区	5・6・13号窯跡	灰原	こ6B区	3層	燃料材	スギ	2.4	6	19	0.40		9～10世紀			
58									スギ	4.2	9	9	0.47					
59									スギ	4.2	9	11	0.47					
60									モミ属	1.6	7	17	0.23					
61									モミ属	1.9	8	-	0.24					
62									モミ属	1.7	8	-	0.21					
63								スギ	1.1	3	9	0.37						
64	20			グリッド		こ4C区	盛上	不明	ツバキ属	0.5	5	-	0.10	一部 SK03	不明			
65	27					こ4A区	盛上		ツバキ属	0.6	10	-	0.06	一部 SK03				
66	34	3次調査	B地区	SK03		A区	覆土	燃料材 か 灰製品	クマシデ属 イヌシデ節	0.8	23	2	0.03	製炭上坑	11世紀前半～ 12世紀中頃			
67									サカキ	0.8	22	3	0.04					
68									エゴノキ属	0.9	13	2	0.07					
69									エゴノキ属	1.0	16	3	0.06					
70									サカキ	1.0	11	2	0.09					
71									サカキ	1.0	15	2	0.07					
72									アサダ	1.7	18	4	0.09					
73										エゴノキ属	1.6	14	3				0.11	PLD-31692
74										クマシデ属 イヌシデ節	1.6	21	3				0.08	
75										エゴノキ属	1.6	14	3				0.11	
76										ニシキキ属	0.5	13	1				0.04	
77										クマシデ属 イヌシデ節	2.2	21	5				0.10	
78		クリ	1.5	5	4	0.30												
79		クマシデ属 イヌシデ節	1.9	15	5	0.13												
80		エゴノキ属	1.1	14	3	0.08												
81		サカキ	0.7	12	1	0.06	PLD-31693											
82	35		B地区	4号窯跡	前庭部	か4-A区	覆土	燃料材	コナラ属 アカガシ亜属	1.0	9	3	0.11		9世紀前半			
83									コナラ属 アカガシ亜属	0.5	11	1	0.05					
84									サクラ属	1.1	8	-	0.14					
85									クリ	2.1	11	6	0.19					
86									サカキ	1.7	24	3	0.07					
87									スギ	2.5	19	5	0.13					
88		サクラ属	1.4	15	3	0.09	PLD-31694											
89	36		B地区	4号窯跡		b区	覆土	燃料材	クマシデ属 イヌシデ節	1.5	17	3	0.09					
90									コナラ属 アカガシ亜属	1.4	6	3	0.23					
91									サクラ属	1.1	25	4	0.04					
92	37					C区	覆土		ツバキ属	1.2	19	4	0.06					
93	38					d区	覆土		ツバキ属	0.8	14	4	0.06					
94	39					か4-A区	1層		モミ属	2.2	15	13	0.15					
95	40					き3-D区		燃料材	モミ属	6.3	14	-	0.45					
96	41					か4-A区			モミ属	2.3	9	16	0.26					
97	42					き4-B区	6層		モミ属	0.5	1	-	0.50					
98	43					SJ02	A区	燃料材	カバノキ属	2.1	23	5	0.09	土師器焼成坑	8世紀後半～ 9世紀前半			
99	44					7号窯跡	m区	燃料材	ハイノキ属	1.2	10	7	0.12	報告書 12 層	10世紀前半			
100	45					7・8号窯跡	灰原	燃料材	クマシデ属 イヌシデ節	1.6	16	7	0.10		8～10世紀			
101	46	2次調査	B地区	SK03		A区	上層	燃料材	モミ属	0.3	1	-	0.30	7号・8号区域	10世紀前半			
102	47					グリッド	え9	包含層	不明	クマシデ属 イヌシデ節	2.9	10	9	0.29	7号・8号区域	不明		

付表 1-3 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号	
103	48		B地区	8号窯跡	前庭部	成成部 境	-	構築材	カエデ属	1.2	10	5	0.12	取設天井構築材	8世紀前半		
104	49	床下b区							コナラ属 アカガシ亜属	3.3	11	8	0.30				
105									アサダ	2.6	21	-	0.12				
106		50			床下c区	燃料材	-	コナラ属 アカガシ亜属	1.3	7	4	0.19					
107								コナラ属 アカガシ亜属	1.4	7	5	0.20					
108								アサダ	1.1	4	4	0.28					
109	51							D区	13層	構築材	-	カエデ属	1.7	13		4	0.13
110	52	D区			-	カエデ属	2.4	13	5			0.18					
111	53	E区			-	カエデ属	2.4	14	5			0.17					
112	54				燃焼部	-	E区	3層	燃料材	クマシデ属 イヌシデ属	2.5	22	11	0.11		報告書6層 8-B号窯1次 床	
113	55	E区								覆土	カエデ属	1.9	13	6			0.15
114																	
115	56			上層						スギ	2.2	9	10	0.24			
116										スギ	1.7	5	12	0.34			
117	57		2号窯跡	前庭部	-	3下層	燃料材	スギ	1.5	4	-	0.38	8世紀前半				
118	58							スギ	4.0	11	17	0.36					
119								スギ	2.8	19	12	0.15					
120								スギ	2.3	5	16	0.46					
121	59							n区	2下層	スギ	-	-		-	節部		
122	60		1-A号窯跡	前庭部	m区	灰層 上層	燃料材	ツバキ属	0.3	2	2	0.15	10世紀前半				
123	61							m区	スギ	1.5	6	3		0.25			
124		2次調査	A地区	1-B号窯跡	-	g区	上層	燃料材	コナラ属 コナラ節	2.1	28	6	0.08	10世紀前半			
125									コナラ属 コナラ節	1.9	25	6	0.08				
126									コナラ属 コナラ節	1.7	24	10	0.07				
127									コナラ属 コナラ節	-	-	-	-		節部		
128	63									g区	上層	モミ属	0.4		3	-	0.13
129	64									l区	上層	モミ属	0.3		5	-	0.06
130										l区	上層	コナラ属 コナラ節	1.8		10	4	0.18
131	65											コナラ属 コナラ節	1.5		12	4	0.13
132												コナラ属 コナラ節	1.8		11	4	0.16
133	66									SK02	-	東南ア ゼ	-		-	ブナ属	0.6
134		d区	上層	ブナ属	1.6	14	6	0.11									
135				ブナ属	1.2	9	5	0.13									
136		No.11	-	コナラ属 コナラ節	1.5	21	4	0.07									
137				コナラ属 コナラ節	1.5	22	3	0.07									
138	68			コナラ属 コナラ節	1.3	25	3	0.05									
139		No.12	-	コナラ属 コナラ節	1.1	24	3	0.05									
140				コナラ属 コナラ節	1.0	25	2	0.04									
141				クリ	1.4	21	3	0.07									
142				クリ	1.5	20	3	0.08									
143	69			クリ	1.1	16	4	0.07									
144		クリ	1.5	20	4	0.08											
145		クリ	1.4	19	4	0.07											
146		クリ	1.6	18	4	0.09											
147	70		SK03	-	う3-A区	-	不明	スギ	2.3	11	11	0.21	10世紀前半				

付表 1-4 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

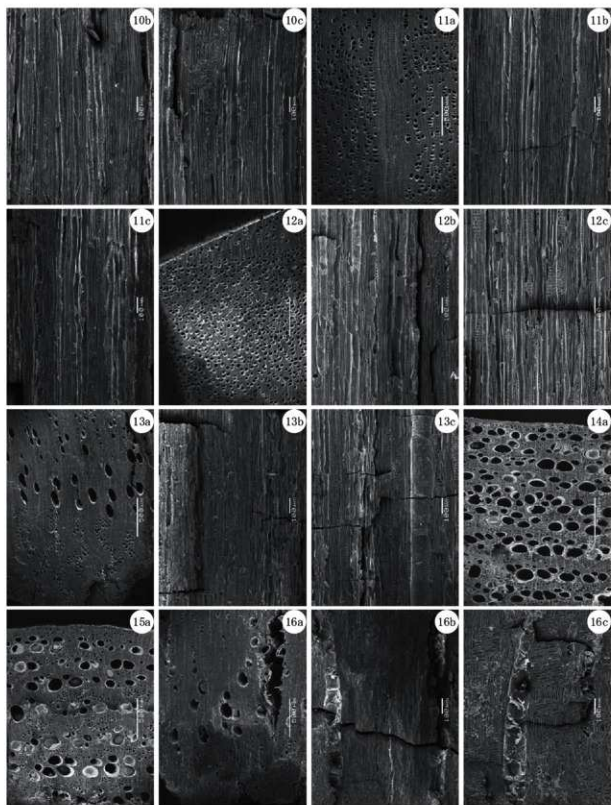
試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	現存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号		
148			A地区	1-A号窯跡	前庭部土坑内			燃料材	モミ属	-	-	-	-	節部	10世紀前半			
149									モミ属	1.3	4	-	0.33					
150	72								クマシデ属 イヌシデ節	1.0	5	2	0.20					
151									スギ	2.0	3	5	0.67					
152									スギ	2.6	4	6	0.65					
153									スギ	1.7	7	7	0.24					
154	73				SK07	-	No.2	-	不明	スギ	4.8	5	10	0.96	10世紀前半			
155										スギ	0.9	7	-	0.13				
156	71				2・1-A・1-B号窯跡	灰原	う3-D区	y1層	燃料材	クマシデ属 イヌシデ節	-	-	-	-	節部	8～10世紀		
157	74									スギ	1.2	3	-	0.40				
158										スギ	2.6	10	11	0.26				
159	75									う4-A区	2層	モミ属	2.2	5	11		0.44	
160	76									う4-C区	2層	スギ	1.1	3	-		0.37	
161										う4-C区	1層	クマシデ属 イヌシデ節	2.2	4	6		0.55	
162	77											クマシデ属 イヌシデ節	1.6	3	5		0.53	
163	78	2次調査								う3-A区	3層	モミ属	1.4	6	7		0.23	
164	79									う3-C区	2層	スギ	3.7	9	-		0.41	
165										う3-B区	2層	モミ属	2.1	5	21		0.42	
166			モミ属	1.9								5	19	0.38				
167	80		モミ属	2.4								8	-	0.30				
168			モミ属	0.8								2	-	0.40				
169			モミ属	1.5								5	-	0.30				
170			う3-C区	7層								クマシデ属 イヌシデ節	2.1	16	17		0.13	
171	81									アサダ	1.9	17	19	0.11				
172										アサダ	1.7	15	16	0.11				
173	82		う3-A区	1層						コナラ属 アカガシ亜属	3.7	14	10	0.26				
174	83		う4-D区	2層	モミ属	1.3	4	4	0.33									
175			う4-D区	6層	モミ属	1.6	15	4	0.11									
176	84				モミ属	1.7	17	4	0.10									
177	85		う4-D区	7層	クリ	0.4	1	-	0.40									
178			粘土塊集中2	う4-A区	不明	モミ属	3.1	13	7	0.24								
179	86					モミ属	1.6	6	-	0.27								
180						モミ属	2.4	6	6	0.40								



図版1 ニツ梨豆岡向山窟跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

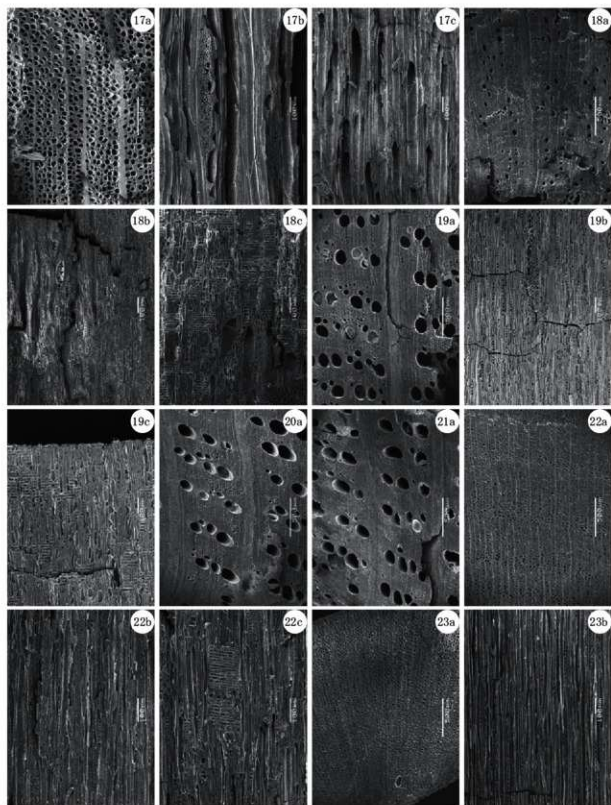
1a-1c.モミ属(No.2)、2c.モミ属(No.44)、3c.モミ属(No.50)、4c.モミ属(No.166)、5a-5c.スギ(No.5)、6c.スギ(No.25)、7c.スギ(No.115)、8c.スギ(No.147)、9a-9c.カバノキ属(No.98)、10a.クマシデ属イヌシデ節(No.74)

a.横断面、b.接線断面、c.放射断面



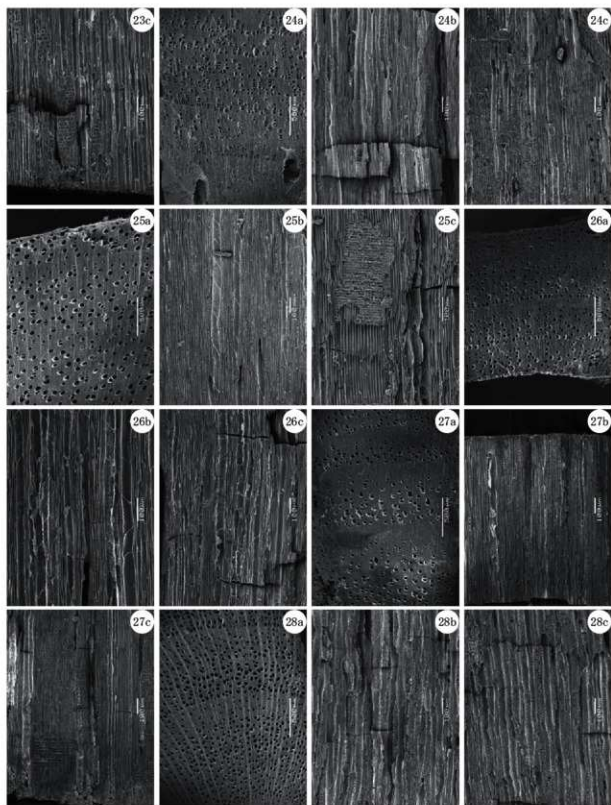
図版2 ニツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

10b-10c.クマシデ属イヌシデ節(No.74)、11a-11c.クマシデ属イヌシデ節(No.77)、12a-12c.アサダ(No.108)、
13a-13c.クリ(No.85)、14a.クリ(No.143)、15a.クリ(No.145)、16a-16c.スダジイ(No.38)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版3 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)

17a-17c.ブナ属(No.133)、18a-18c.コナラ属アカガシ亜属(No.82)、19a-19c.コナラ属コナラ節(No.137)、20a.コナラ属コナラ節(No.139)、21a.コナラ属コナラ節(No.140)、22a-22c.ツバキ属(No.65)、23a-23b.サカキ(No.70)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版4 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(4)
23c.サカキ(No.70)、24a-24c.サクラ属(No.91)、25a-25c.カエデ属(No.109)、26a-26c.ニシキギ属(No.76)、27a-
27c.エゴノキ属(No.69)、28a-28c.ハイノキ属(No.99)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

















195



196



279



193



275 ~ 278 ほか

























SK02 全景



SK02 セクション (上: A-A', 下: B-B')



SK03 (調査区 E-1 区側) 全景



SK03 (調査区 E-1 区側) 掘り方



SK03 (調査区 D 区側) 全景



SK03 (調査区 D 区側) 掘り方



SK03 (調査区 D 区側) セクション (手前: B-B', 奥: C-C')



SK03 (調査区 D 区側) 床面断ち割り

報 告 書 抄 録

ふりがな	こまつしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ 12							
書 名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XII							
副 書 名	二ツ梨豆岡向山窯跡群							
巻 次								
編・著者名	横幕 真、宮田 明							
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 923-0075 石川県小松市原町 77-8 TEL (0761) 47 - 5713							
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふりがな 二ツ梨 豆岡向山	石川県小松市 二ツ梨町	17203	03014	36° 19' 53"	136° 25' 48"	2005. 7.21～ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19～ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2～ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1～ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1～ 2009.12.11	600	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二ツ梨 豆岡向山	窯 跡	平 安	須恵器窯跡 1、土坑 3、 灰原	須恵器、土師器、炭化材		遺物編 1		
要 約	4号窯調査の遺物編。付章として、その他の遺構（SK02・03）と自然科学分析の報告を掲載。							

小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山遺跡群

平成 29 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713

印刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
